もったいない・おかげさま・ほどほどに、が環境と人間を育てる

M・O・H通信

もう

M·O·H communication

特集：文化「過去・現在・未来」

32号
2011
Summer

Vol.32
2011 Summer

「闇に舞う光」2010年
アクリル・キャンバス、1303×803mm

「無題100712」2010年
アクリル・マットメディウム・キャンバス、
273×455mm

眞野 丘秋（まのたかあき）
1976年彦根市生まれ。アーティストとして滋賀を拠点に国際的に活動している。'07年から年に1回のペースで、地元で個展を開催し続けている。アクリル画をメインに制作し、写真集や小説も出版している。半ばチャネリングの状態で制作し、完成した作品には「コンセプトが無い」のが特徴である。宇宙に偏在する色と形を、作家が媒体となって地上に下ろすという意識で制作している。
http://www8.ocn.ne.jp/~shamre/

「M·O·H」のマーク＝牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします。

★M·O·H通信の役割★

持続可能で豊かな循環型社会を築く社会人の意識を向上するためMOH通信は情報を発信し交流を続けます

M →もったいない　**循環**　他の生命を奪って得たものを使わせて頂く

O → おかげさま　**共生**　人は一人では生きられない、環境によって生かされている

H → ほどほどに　**抑制**　欲はほどほどに、良き環境を作り上げるために

contents
目 次

特集「文化」— 過去・現在・未来

特別寄稿—1　東日本 大震災を経て、日本と滋賀県の社会転換を考える
正常な安全感覚とは？　嘉田 由紀子 …… 5

特別寄稿—2
大震災と「持続可能社会」　内藤 正明 …… 13

緊急レポート—1　—東日本大震災・被災地での活動から見えたこと—
本当の『支援』とは何か　田中 光一 …… 15

緊急レポート—2　東日本大震災報告会
僧侶として写真家として　岸野 亮哉 …… 20

M・O・H鼎談—1　琵琶湖のほとりで育まれた未来への思い
滋賀に宿る“時”の流れ　高城 修三 & 今関 信子 & 森 建司 …… 25

M・O・H鼎談—2
農的生活からみる幸福論　山崎 隆 & 池田 喜久子 & 森 建司 …… 33

M・O・Hレポート—1　原木しいたけ栽培に取り組む家族の物語
届けたいのは本物への情熱　横田 千洋 …… 43

M・O・Hレポート—2　生産者・消費者交流会』3月26日、多賀町の「里の駅」ー圓屋敷で開催
地域を元気に！地産地消—生産者と消費者の絆つくり　長宗 清司 …… 52

商家の家訓の話　第17回
番外編：大震災に寄せて—今こそ“希望”を　末永 國紀 …… 57

漫画
「山暮らし子育て日記」　オノ ミユキ …… 59

心温まる物語
もう一つの力を信じたい　今関 信子 …… 61

里のお話
夏蕨　三山 元暎 ……63

本の紹介　…… 64

新江州メッセージ…… 65

講演日記　…… 68

M・O・Hニュース　…… 68
いいものみつけた・田舎暮らしフェスタ2010・地産地消ニュース

通信概要　…… 69

読者の声　…… 70

表紙写真

琵琶湖に浮かぶ竹生島。日本三弁財天の一つ。8月15日には「蓮華会」が執り行われる

文化 ―「過去・現在・未来」

西国33ヵ所岩間寺の麓の集落。
瀬田川周辺は市街化が進むが、
この辺りでは棚田が残っている。

あなたの時代がやってくる

森　建司

経済至上主義が、いよいよ終盤を迎えようとしている。東日本東北大震災、そして大津波という自然の脅威と、原発事故が私たちに多くの示唆を与えてくれた。人類は地球に君臨し、自然界をも掌握しきったように思っていた。「科学技術」と「経済社会の豊かさ」が、自らの能力を過信させたのだろう。それを一瞬の間に打ち砕いた自然現象の巨大さ、荒々しさはまさに、私たちには〝想定外〟だった。

この体験の中から、近来、積み上げてきた「経済至上主義のさらなる繁栄成長」の計画を書き直す必要がある。原子力由来のエネルギーの脆弱さを目の当たりに見た。被害に遭われた皆さんには、お悔やみとお見舞いを申し上げたい。一日も早い復旧を願うばかりだ。

自然の中に生きる人間とは何か、動植物に対して支配的な行動をしているのは、われわれ人間だけである。人間は本来、自然界では弱い存在だ。自然界に生かされているという考え方に立ち戻る時だ。自然を利用して人間の暮らしを便利にしようとする、愚かな考え方をする前に、自然の一部でしかないことを自覚する必要がある。自然に逆らっては生きてはいけない。近年の自然を征服し利用しようとする考えを反省するべきだろう。

原子力発電推進に関しては、賛成派と反対派で分かれるだろうが、原子力発電は自然破壊を促す。原子力発電に頼らない、自然エネルギー利用や省エネなど、地球規模の投資が必要になってきている。自然エネルギーへの投資が次なる課題を残さなければいいのだが……。

経済的豊かさを追い求めると、われわれにとって致命的な被害をもたらすことは明確になった。

今こそ、市民運動が求められるときだ。市民の動きが政治や産業を動かす時が来る。市民が中心になって考え、つくる社会が必要だ。選挙権の行使、買い物などに際して意思を表明する心構えを持たねばならない。私たちが提唱する、もったいない、おかげさま、ほどほどに、を普及することが、新たな社会の扉を開ける一助になれば幸いだ。

特別寄稿

安全感覚とは？

東日本 大震災を経て、日本と滋賀県の社会転換を考える

嘉田由紀子
滋賀県知事

「想定外」を想定できない政治意識構造が課題

東日本大震災から1ヶ月。地震による破壊に加えて、津波ですべてが流され、その上に原発事故による放射能汚染の危機。こんな複合災害がこれまで日本にあっただろうか。背筋が寒くなる思いにかられながら、被災された人たちの暮らしが一日も早く取り戻され、一日も早い地域の復興を願い、この筆をとっている。短文ではとうてい意を尽くせないほどの大きな課題に直面しながら、今、日本社会が大きな岐路にたっていることを深く感じざるを得ない。今までの日本社会の成り立ちそのものを転換しないと、日本の未来に希望が持てない、という思いが日々募るからだ。本稿では、巨大な行政・政治システムの中で、専門家といわれる人たちの判断のみが優先され、普通の生活感覚が機能せずに巨大化してきた日本の原子力政策に対して、人間として世代を超えて命をつなぎ、未来を持続的に拓くための「正常な安全感覚」を

地盤沈下の影響で冠水が続く気仙沼市街地
（写真= 田中光一）

正常な

いかに埋め込んでいくのか、まさに素人的に問題提起をしてみたい。

そもそも地殻変動によって成り立つ日本列島は、地震が定期的に襲い、台風や梅雨洪水も加わる災害列島であった。日本の歴史は災害の歴史でもあった。その災害に備えるために、地域共同体の相互扶助組織が強化され、高度経済成長期までの日本の社会的基盤をつくってきた。たとえば河川の洪水対応をみても、堤防強化や河辺林の整備、水防避難体制の下、洪水が起きても死者数は少なく、また災害から立ち上がれないような壊滅的被害を防ぐ工夫も土地利用の仕組みの中に埋め込まれていた。地域住民に愛されながら守られてきた河川を、私は「近い川」と呼んできた。ここには強靭な（ロバストな）水害抵抗力が地域社会の中に埋め込まれていた。

それが崩れるのが高度経済成長期である。経済成長のために洪水常襲地も開発され、「○○ニュータウン」などと、自然豊かな住宅地として新住民に売り出された。河川面積は狭められ

カミソリ護岸となり、少しの水でも都市中心部に水があふれるようになった。河川工学の知識が深まり、河川の中に水を閉じ込めようと巨大ダム技術もとりいれられてきた。高度経済成長による経済力で巨額のダム建設投資も可能となり、河川は次第に住民の手に届かなくなり「遠い川」となった。特定の雨量を「想定」して（「基本高水」と専門的に呼ぶ）、想定内の洪水は完全に防ぐ、しかしそれを超える水害にはまったく手がだせない。というか、想定を超える水害には行政は責任をもたなくてもいい。「想定」を設定するのは、行政にとって責任範囲を決める逃げ道でもある。でも、住民は命を失ったら元も子もない。水害に対する強靭な抵抗力は、要素還元的な科学的知識を駆使する官僚テクノクラートからは無視され、同業者的な手続き責任だけが埋め込まれてきた。

行政の責任範囲にそって官僚的対策をとるのがダムに頼る治水だ。ダム依存の水害対策を広めたのは、ダム神話を信じる政治家とその論理を提供する官僚、ささえる巨大建設業界と大学などの専門家という「河川政策をめぐる鉄のトライアングル（三角形）」だ。

「遠い川」になると、そもそも住民の間に河川への危機認識が薄れる。その上、巨大ダムができて「これで枕を高くして眠れる」という安全神話が流布され、住民も地域社会も備えを忘れ、無防備となってしまう。２００４年７月、新潟県刈谷田川の水害、10月の京都府由良川の水害をみて、私自身は、「ダム安全神話」による備え不足が結果として水害被害を増やしてしまった、という深刻な状況を改めて認識せざるを得なかった（注1：嘉田由紀子語り、古谷桂信構成、『生活環境主義で行こう！ ―琵琶湖に恋した知事』、岩波書店、２００８年）。

洪水は自然現象だが、水害は社会現象だ。自然はいつどんな牙をむくかわからない。いかなる洪水、想定外の洪水でも命を守り、生活再建できるような万全の備えを社会に埋め込むことが、行政、政治の仕事ではないだろうか。ロバストな洪水対策が、県民の命と暮らしを守る知事としての使命ではないだろうか。そのような思いから、いかなる洪水でも命を守り、生活破壊を避ける流域治水政策を進め、土地利用規制なども含めて、危ないところに人が住まない、川の自然を活かしながら、川と共生できる水害対策を、と２００６年の知事就任以来訴えてきた。２０１１年には、流域治水基本方針を提示し、条例化も近いうちにめざしたい、と考えている（注2：嘉田由紀子、瀧健太郎他、「生活環境主義を基調とした治水政策論―環境社会学の政策的位置」、環境社会学研究、No16.pp.33-47 ２０１０年、環境社会学会）。

これは制御論的に言えば、英語でいう“Robustness”（ロバストネス）を埋め込むことである。ロバスト性とは、ある系が応力や環境の変化といった外乱の影響によって変化することを阻止する内的な仕組みのことであり、いかなる洪水が社会システムにもたらされようと、社会として強靭な仕組みを埋め込むことである。

このような考え方は県議会での真っぷたつの議論となった。「ダム建設こそ安全を担保できる」「ダム建設をやめて住民が命を失ったら知事の瑕疵を

問い、辞任をせまる」「想定外の洪水を考えるのは知事としての怠慢だ。想定されているなら知事はすべての危険に備えるべきだ」。

このような県議会での議論で私が意外だったのは、「想定外」を想定することは政治家としての怠慢だ、と責任を迫られたことだ。そして「命を守るためには時として農地が水に浸かることは受忍してほしい」という訴えに、「農地であっても水につけるのは政治の怠慢」と非難されたことだ。

川の水害被害の歴史を長い間研究してきた私としては、ダム建設目的となっている「基本高水」という想定を超える洪水は想定内だった。そして時として、命を守るためにやむを得ず農地を水につけざるを得ないこともありうる。しかし、「被害を知っているならそれに備えるのが政治家の役割だ」という官僚制度の手続き的な内部論理に絡めとられた議員の議論により、想定外の自然の怖さを公言できない政治的不自由を感じ続けてきた。

原子力災害についても、同様の意識構造が働いている、ということを感じたのは、知事に就任してからだ。

原子力災害におけるEPZという"想定"

琵琶湖研究を長い間行っていると、どうしても若狭湾の原子力発電所の存在が気になる。富栄養化防止条例やさまざまな施策により琵琶湖の水質、生態系保全を図っていても、若狭湾の原子力発電所に万一の放射能漏れ事故などがあり、それが、気象条件が悪い北西の大風が琵琶湖にむいて吹いている時ならば、「あっという間」に琵琶湖が汚染されてしまう。

また現代の都市生活は、水源が遠くなり、巨大水道システムは、いざという地震などによる経路破壊に弱い。阪神淡路大震災の時、いくら琵琶湖に水が満々と湛えられていても、神戸の水道に水を送ることができなかった。琵琶湖が1400万人の水源という仕組み自体が社会的なリスクを内包している。

地震や原子力発電所事故など、万一の危険を想定して、命の水は琵琶湖だけに頼るのではなく、それぞれの地域の地下水や湧き水など多様な水源を使い続け、守り続けたい、と私自身、各地で訴えてきた。生活様式を多様化することで、いざという時の危機回避を図るということだ。英語では"Redundancy"(リダンダンシー)と言っている。構造破壊につながる危険を低減させ、また、一部が破損し機能を停止した状態でも、その機能をある程度保持するために設けられる「余裕」「遊び」という意味でもある。「冗長性」などと翻訳されるが、「代替手段を確保すること」ということだろうか。

そもそも日本人の暮らしぶりにはさまざまな代替手段を確保するという生活意識が埋め込まれていた。私の実家の母はいつも、今からみると「生活代替案」を埋め込んでいた。たとえば水道が通っても、「万一のときのために」と井戸を残し、下水道が通った後でも、「ぽっとん便所」がないと万一の時不安、と言っていた。燃料もガスだけでなく、カマドを残して火を燃やせる暮らしぶりを維持していた。

❶湖東平野を流れる愛知川　❷琵琶湖博物館に保存された昭和30年代の暮らしを残す「冨江家住宅」
❸トイレはくみ取り、風呂の水は再利用

「M・O・H」通信でいう「もったいない」「おかげさまで」「ほどほどに」という考え方も、多様で楽しみを含んだ代替手段確保を求めながら、災害や災難が多い日本社会における暮らしの安心を埋め込んだ生活哲学ともいえる。

さて、原子力発電所事故の問題に戻ろう。知事に就任してから県の「地域防災計画」（原子力災害対策編）をみると、そこでは、滋賀県は国が定める避難区域（EPZ：Emergency Planning Zone）である10キロ圏域にはいっていないので、そもそも事故に備えるための計画は不要、ということだ。敦賀の日本原電の原子力発電所から、余呉町（現長浜市）までは13キロという距離しかないが、この地域防災計画では、住民の安心のためのモニタリングと情報伝達の仕組みが記述されているに過ぎない。しかも地図の上にコンパスで円を描いて、機械的に危険域を想定する、というのもいかにも非現実的だ。

琵琶湖の風などについても琵琶湖博物館時代から住民参加で観測調査をしてきた立場から、冬から春にかけては

北西の風が大変強いことも知っていた。現実的に事故がおきることを想定するなら、たとえば季節毎の気象条件や地形条件による想定を複数提示する必要があるだろう。

しかし、EPZは国の法律体系の中で決められることであり、知事としては、何も意見をはさむ余地はない、という。私自身も、県議会での質問に対してそれまでに準備された内容の答弁をせざるを得なかった。

今回の福島第一原子力発電所事故への対応をみると、河川政策との構造的な類似を指摘せざるを得ない。情報公開という意味からの秘密主義は河川政策以上に徹底している。たとえば、滋賀県内を移動する核燃料輸送などの情報も自治体には出されていない。万一の事故の時に自治体はどう備えるのか、その備えさえも想定できない。原子力政策については、関係地方自治体は完全に「かやの外」であったのだ。

このような状態を踏まえて、私自身、3月15日には、地域防災計画の大幅な見直しが必要と宣言した。できるだけすみやかに、防災計画の見直しに着手したい。

関西広域連合としての原子力災害に対する対応

3・11の発災直後、3月13日には、近畿など2府5県の広域行政組織、関西広域連合では、国からの指示を待つ前に、相手先をきめて手分けしながら支援するためのいわゆる「ペアリング支援」の枠組みをつくった。

あわせて、福島での原子力発電所の事故対応を見ながら、4月8日には、関西電力に対して、原子力発電所の安全対策や災害時の対応などについて緊急の申し入れをした。主に3点を含んでいる。ひとつは、「安全対策」であり、緊急時の電源対策など、安全確保や事故発生時の監視・情報伝達の体制強化を含んでいる。2点目は、国からの指示を待つことなく、自治体として地域防災計画の見直しを進めるため、原発施設の安全対策などの情報提供を求め、同時に「定期的な協議の場」の設定も求めた。特に、これまで情報的にも完全に蚊帳の外に置かれていた自治体としての「定期的な協議の場」の提案はこれまでにない画期的なものである。また3点目は、原子力発電所への依存を低くするための、自然エネルギー導入への積極的な取り組みを求めた。

関西電力の八木社長は申し入れに対し、電源車の配備や空冷式の移動式発電装置の設置など、緊急安全対策や津波防止堤防の強化など、災害防止対策の体制強化策を説明した。監視体制の強化にむけて「モニタリングポストの設置拡大なども検討していく」とした。また地域防災計画の見直し検討の際の原発施設情報提供についても「積極的に提供させていただく」とし、関係府県との定期協議についても「要請に沿って積極的に対応していく」と回答した。自然エネルギーについても積極的な取り組みを進めるとの回答を行った。

関西広域連合としての申し入れの背景には、社会的サービスをめぐるいわゆる「受益圏」と「受苦圏」の考え方がある。関西電力の原子力発電所のサービスを受ける範囲に、ほぼ重なる関西広域

連合としては、原子力発電所の運営のあり方について一方的にその危険性を強調して社会問題化しようとしているのではない。逆に受益当事者の立場から、永続的に電力サービスが得られるよう社会的危機を回避するというねらいをもっており、そのような意味では関西電力の経営者と共通の意識をもつものでもある。

一方で、万一の事故がおきた時のもっとも被害が深い「受苦圏」としては福井県が中心となるが、同時に京都府北部や滋賀県北部も、今回の福島原発の事故をみた時に、その生活被害を十分想定しなければならない。

さらに、琵琶湖が万一汚染されると、これは、関西広域の水資源という水供給の受益圏全体へ影響を及ぼすことになる。その時の受苦当事者は琵琶湖・滋賀県である。

正常な安全感覚を行政、政治の場に働かせるために

原子力発電政策の是非については、今回の複合災害を受けて、短期的、中長期的に一大社会転換が必要と私自身は考えている。そのためには、先述したように、社会的インフラ整備の中にリダンダンシー（代替可能性）を埋め込み、多様なエネルギー源を確保するとともに、社会システムに強烈な外圧が加わってもロバストな内的抵抗性をもたせ、持続可能となる、社会システムへの大転換が必要ではないだろうか。

生活者としての正常な安全感覚を働かせた時に、今こそ原子力発電のもつ非持続性を指摘せざるをえない。しかし、それはゼロか百という運動的な議論ではない。そこでは、「必要性」や「危険性」に対する冷静な大人の議論を埋め込むべきであろう。

まず短期的には、関西での電力供給の約半分を占めている原子力発電所について、その「必要性」について、ひろく議論するべきだろう。今のところ短期的には、私はその必要性は主張せざるを得ない。問題は、短期的に必要であっても、このまま中長期的にもその方針のままいくべきかどうか、という点である。

前述のように、日本列島は災害大国であり、そもそも地震、地殻変動によって成り立つ地勢にある。原子力発電への依存度を次第に低くし、自然エネルギーなどへの転換を図る必要があるだろう。

地震学者の石橋克彦さんは、すでに1997年に、以下のように警告している（注3：石橋克彦、「原発震災」、『科学』VOL67,No10,pp.p720-724）。

「日本は今、地震活動頻発期にはいっている」「地震は自然現象だが、その被害が大きくなるかどうかの震災は社会現象」「日本では通常震災にプラスして原発災害が複合する”原発震災“が発生し、何世代にもわたって深刻な被害におびえながら暮らすという未来図も大袈裟ではない」と。さらに具体的に静岡県の浜岡原発に言及し、東南海地震が近づきつつあることを予測する地震学者として「正常な安全感覚があるならば、来世紀（21世紀）半ばまでに確実に発生する巨大地震の震源域の中心に位置する浜岡原発は廃炉を目指すべき」と指摘する。

止める勇気を持って政治家を選ぶ―滋賀県ならではの持続的社会を求めて

新幹線の新駅計画ひとつを中止するのに大変なプロセスを経たこと、ダムひとつを止めるにも、まさに政権交代が必要なほど大きな政治問題になっている日本の有様をみると、原子力発電所を止める、という判断がいかに困難な道のりであるか、容易に想像がつく。

しかし、ここで「止める勇気」を持たないと、これから次つぎと起こるかもしれない地震災害にプラスする原発災害で、まさに日本は、物理的に沈没するだけでなく、国際的に広がる風評被害の中で、経済的にも社会的にも沈没してしまう。そのような恐ろしい未来図を、正常な危機感覚としてもってしまうのは私だけでしょうか。

今、滋賀県政は新しい県議をむかえて、まさに、未来にむけて滋賀県の安全を確保しながら、県民が安心して暮らす「住み心地日本一」をめざして新しい政治が始まります。「住み心地」改善の大きな要素に、災害から命を守り、暮らしの継続が含まれていることは論をまちません。

3・11の東日本大震災という未曾有の国難の中、3万人近くの人たちが命を落とし、または行方がわからず、何十万人もの人たちが暮らしを根こそぎ破壊され、将来へのビジョンも描くことができず、まだまだ不安な中にあります。本人にとってまったく責任のない災害を受けて、命を落とし、苦しみの中にある人たちの〝受難の苦しみ〟を未来にむけて無駄にしないためにも、私たちは責任をもって、未来の日本の針路をきめていかなければならないと思います。

それは、緑豊かな、生き物のにぎわい溢れる水と大地に恵まれ、心静かに神と仏に祈りをささげ、経済的にも元気で、子どもや若者の活力も高い滋賀県からこそ、代替可能性（リダンダンシー）と強靭な内的システム（ロバストネス）を埋め込んだ社会的転換を発信し、日本社会の大転換を主張したいと思います。

知事としての未来の子どもたちにむけての使命感に加えて、4人の孫をもつ普通のおばぁちゃんの感覚をふまえて、正常な安全感覚を働かせながら、この滋賀丸を運航していきたい、と改めて強く決意をしております。

（2011年4月18日）

まっすぐに、しなやかに

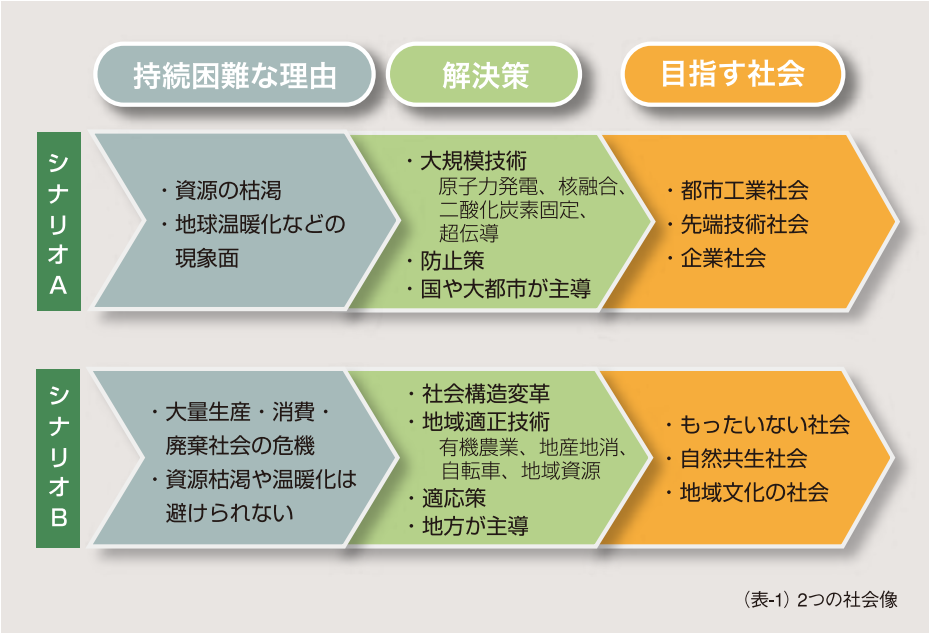
嘉田由紀子

●かだ ゆきこ　1950年、埼玉県生まれ。1973年、京都大学農学部卒業。1979年より、家族で大津市に在住。1981年、京都大学大学院農学研究科博士後期課程修了。同年、滋賀県職員に採用。1982年琵琶湖研究所職員、1997年琵琶湖博物館総括学芸員、2000年京都精華大学人文学部教授、琵琶湖博物館研究顧問を経て、2006年7月より滋賀県知事に就任。趣味はカラオケ、孫と過ごすこと。特技は手打ちうどん、地図が読める。座右の銘は「まっすぐに、しなやかに」

大震災と「持続可能社会」

内藤 正明
NPO循環共生社会システム研究所
代表理事

この10年ばかり、「持続可能社会」ということについて世界中で議論がされてきました。しかしいま、未曾有ともいうべき東日本大震災に遭遇して、このような大災害も視野に入れて、改めて持続可能社会の議論を見直そうという機運が起こってきたのは当然でしょう。つまり、どんな社会であったら今回の震災被害を最小化でき、また復興後にはどんな社会を作っていくのが、本当の持続可能社会かということです。



（表-1）2つの社会像

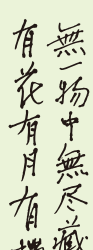
これまで、国および産業界は一貫して、高度な技術開発によって持続可能社会は達成できると主張してきました。これに対して、私はこれとは異なる「自然と共生するような社会像」を提案してきましたが、その二つの提案の特徴を対比して示すと、（表―1）のようですが、この両者を見て、皆さんはどう感じられるでしょうか?

先端技術社会では、エネルギー源として原子力への依存が前提になっているので、それが今回の震災で否定的になると、どのような方向転換をするのでしょうか。これからの方向を知りたいと思っていますが、大電力会社の利害をベースに動いてきた我が国のエネルギー政策があくまで踏襲されるなら、原子力を今後も推進するしか選択肢はないでしょう。さてそれを世論が受け入れるでしょうか?

私が提唱してきた「自然共生社会」では、地球温暖化を止めるというよりも、起こっても何とか耐えて生き延び、しかも石油に依らないでできるだけ豊かに生きられる社会を基本理念としています。そのキーワードは〝自然の力を活用する、人の絆を再生する、M・O・Hの心を大事にする〟というようなことであります。このことが、今回の災害を見て語られる今後の社会の方向と一致しているのは、その両者の前提条件（石油依存の現代技術には頼らないで、人と人の絆で生き抜かねばならない）を考えたとき不思議はないでしょう。

このM・O・Hが提唱してきた理念が、大災害を契機として改めて認められる状況になったとすれば、一層M・O・H社会の実現に邁進するのが使命と言えましょう。

それこそが、被災された多数の方たちの犠牲を無にしないために、私達のできる役割であると思いますので…。



●ないとう まさあき＝1939年大阪府生まれ。1962年京都大学工学部卒業、1969年同工学博士、1974年 国立環境研究所主任研究官、1990年同1969年同工学博士、1974年 国立環境研究所主任研究官、1990年同統括研究部長、1995年京都大学工学研究科教授、2002年同大学院地球環境学堂長。
現職／佛教大学社会学部教授、琵琶湖環境科学研究センター長、京都大学名誉教授、（NPO）循環共生社会システム研究所・代表理事、（NPO）KES環境機構・代表理事、他。
著書／『持続可能な社会システム』、『地球環境と科学技術』岩波講座 など。
活動／持続可能社会の理念と実現方法に向けた研究およびその実践活動。

緊急レポート

『支援』とは何か

―東日本大震災・被災地での活動から見えたこと―

（写真・文）
田中 光一
東近江市社会福祉協議会

❶津波のため港で座礁した大型漁船　❷流された家屋　❸瓦礫が積み上げられた街並み　❹壊滅状態の福祉施設（気仙沼市）

本当の

災害ボランティアセンターは、主に大規模な災害（地震、水害、噴火等）の発災時に、被災地でのボランティア活動を効率よく推進するため設立される組織である。3月11日に起きた東日本大震災では、100ヶ所以上の地域で災害ボランティアセンターが次々と立ち上がり、現在、ボランティアの助けを求める被災された人々と、被災された人々を支援したいボランティアとのコーディネートが行なわれている。

そのような中、私は、近畿ブロック府県社会福祉協議会からの派遣で、東日本大震災の発生から約2週間経った3月26日から4月2日まで、宮城県気仙沼市災害ボランティアセンターの立ち上げ運営支援を行なってきた。

日本でも有数のマグロ、カツオ、サンマの水揚げ高を誇り、ふかひれの産地としても有名

❶凄惨な風景が広がる住宅街　❷津波で破壊されたＪＲ気仙沼線の駅舎　❸河川まで流され座礁した漁船　❹被災された人々と救援ボランティアをコーディネートする拠点　❺県内外から多くのボランティアが参加　❻ボランティアによる家屋の泥かき　❼スリランカ人によるカレーの炊き出し（スマトラ沖地震の際の恩返しをしたい！）　❽小学生が手書きで作る「ファイト新聞」が避難者を元気づける　❾災害ボランティアセンターで活躍する高校生と大学生

な漁港のまち気仙沼。しかし、今は、元のまち並みがどのようなものであったのか、想像もつかないほど変わり果てた光景が沿岸部に広がっている。この地を初めて訪れたが、津波が来る直前まで、おそらくいつも通りに人々は生活していたであろう痕跡があちこちに見られる。それを思うと、突然悲しみに襲われ、涙が溢れた。

国内観測史上最大のマグニチュード9・0という未曾有の大地震は、日本全国各地に数分間の揺れをもたらした。特に、東北地方から関東地方にかけての沿岸部では、これまで人々が経験したことのない高さの津波が襲来し、人々が誇りとしていた美しいまちを次々と飲み込み破壊していった。

人口約74,000人の気仙沼市でも、発災後、重油漏れによる大規模な火災が3ヶ所で起き、津波により市街地の

1／3が冠水し、死者・行方不明者も多数という甚大な被害を受けた。そして、復旧・復興支援の要となる市役所は津波で1階が浸水、道路や鉄道も寸断され、支援が行き届かず孤立する地域も出た。現地入りした時には、避難所は100ヶ所超、避難者は13,000人以上、ライフラインで復旧していたのは電気のみで、水道は断水、ガスは復旧未定という状況であった。

ニーズ調査で、被災された福祉施設の職員から津波が襲ってきた当時の様子を伺うと、「目線を超え、壁のように迫ってくる津波に驚き、慌てて高台へ避難した。その後、いとも簡単に家や自動車や船が流され、ものすごい速さの引き潮に飲み込まれ沖まで流されていく人の姿を、唖然としながら見ていた」と、多くの人々が間一髪のところで助かったことを話される。

依然として余震が続く中で、市民の暮らしの復興に向けて気仙沼市災害ボランティアセンターでは、家屋にたまった泥のかき出しや家財道具の後片付け、全国から届く救援物資の仕分け、避難所での炊き出しなどの活動をボランティアの力を得ながら推進した。現場では、県内外から集まったボランティアが、被災された人々の声に応えようと、温かくきめ細やかな活動を繰り広げていた。

今回の災害はあまりにも広域かつ被害が甚大で、支援する側が過去の災害から培ってきた被災地支援のノウハウや復旧・復興のプロセス（原理原則）があてはまらない。あらゆることが想定外なのである。そのような中、復興支援活動を通して強く感じたのは、被災された人々の気持ちを大切にした寄り添う支援が、長期的・継続的に必要だということである。

先の見えない避難生活を送る被災された人々と、帰る所がある支援する側との立場の差はあまりにも大きい。そのため、支援する側の善意と努力だけでは、決して被災された人々への本当の支援とはならない。

気仙沼の人々が、「まちを自分たちの手で復興させて、以前のような〝海と山が綺麗な気仙沼市〟を取り戻したい」と強い想いを持って暮らしているように、その他の地域でも被災された多くの人々が自分たちのまちを復興させたいと願っている。そうした想いに対して私たち支援する側ができることは、まちが完全に復興するまで、様々な支援活動を通して、被災された人々の気持ちに寄り添い、いつまでも温かい応援メッセージを送り続けることではないだろうか。

知行合一 田中光一

●たなか こういち＝1972年生まれ。大津市出身。社会福祉法人東近江市社会福祉協議会地域福祉担当主任主事。地域住民による地域福祉の増進活動を支援している。台風23号兵庫県宮津市（2004年）、新潟県中越地震川口町（2004年）、東日本大震災（宮城県気仙沼市、南三陸町（2011年）の災害復興支援に従事。社会福祉士。コミュニティ・アーキテクト（近江環人）・ネットワーク。滋賀県立大学非常勤講師。

報告をする岸野亮哉氏（左）

僧侶として写真家として
東日本大震災報告会

今回の震災に際しどのような支援をすれば良いか悩んでいました。そんな折り（財）日本写真家協会の仲間であり京都のお寺の副住職である岸野亮哉さんが、独自に現地へ物資を運んでいると知りました。

僧侶として写真家として見た現地の姿。4月17日に京都市岩倉図書館で報告会があったので行ってきました。

■ 京都市岩倉図書館
■ 2011年4月17日
■写真／岸野亮哉
■文／辻村耕司

❶石巻市　このあたりは津波災害後、火災が発生したという　❷石巻市
❸南三陸町　捜索活動を行う警察官

三月十一日の夜には取材仲間と現地へ向かいました。翌日には福島県の南約百キロの地点に着いたのですが福島第一原発から煙が上がっている映像を見て引き返しました。

その後、報道などから被害の大きさを知り、救援物資を運ぶことにしました。私は浄土宗西山禅林寺派の僧侶なのですが、被災地域に同じ宗派の寺院がないこともあり、避難所になってる他宗派のお寺をめざし、支援物資を出来るだけ積み込んで十七日に京都を出発しました。発電機・水・ガソリン・灯油・食料百人分・電池・懐中電灯などを調達。救援物資を運ぶというので警察署から東北自動車道の通行許可証をもらい、新聞やツイッター等で情報収集しながら、最終的に岩手県陸前高田市内の寺院をめざしました。以降六ケ寺に物資を運ぶことになりました。

《南三陸町》

十九日、陸前高田市に向かう途中、当時、八千人が安否不明と聞いていた宮城県の南三陸町に山側から入りました。海から一キロ以上離れていましたが一気に瓦礫の山が目に飛び込んで来ました。自衛隊員や警察官が一斉に行方不明者を捜索していました。

《陸前高田市》

十九日の夜に陸前高田市に到着。市の中心地は被害がひどく、あるはずのJRの駅がなく、建物もなく、通行できない道もありました。ようやく四十名程が避難されているお寺に着きました。びっくりされるご住職。「ガソリンを持ってきました」と伝えると真っ暗な中に歓声があがりました。プロパンガスがあり、井戸もありましたが、自衛隊が物資を持ってきたのはつい数日前という状態でした。

そのお寺（慈恩寺さん）では毎日がお葬式の連続、ご住職の妹さん夫妻とその息子さんの三人が行方不明でした（その後、御遺体が発見された）。それにも関わらず避難された方に心を尽くし、仮設のお風呂が出来ても人に譲られ自分は後回しという方でした。すばらしいお寺さんに出会えました。

隣にある大船渡市内のお寺には津波の石碑が残り江戸時代からの津波の記録が刻まれています。また、別のお寺には本堂に大きな絵が掛かっていました。溺れる人々、屋根の上で助けを求める人、先代のご住職が明治二十九年の津波被災の絵を模写してもらい津波の怖さを忘れんがために本堂に掲げました。今回は予想をはるかに超えた津波だったようです。被災した女性の話では、父親の教えとして「大きな地震が起これば、必ず大きな津波がくる」と聞かされていたそうです。また、別の方からは、父母を助けようとして家に向かい亡くなった人も多いと聞きました。

《供養》

僧侶だから入れる場所があります。何カ所かの御遺体の安置所でお参りをしました。岩手県釜石市の安置所では、私が滞在した数十分の間にも、御遺体が運び込まれていました。陸前高田市のある安置所には三百五体。ある若い女性は三月十五日に見つかったのですが、約二週間経つのに引き取り

1

3

2

4

❶陸前高田市　慈恩寺さんの山門前
❷陸前高田市　漁業で使用する資材等が電線に巻き付いていた。津波の高さを知ることが出来る
❸陸前高田市　市民体育館。多数の人が地震後、避難してきたが、津波が襲い多くの人が犠牲となった
❹陸前高田市　線路もねじ曲がっている
❺陸前高田市　海上では捜索活動が行われていた

手がいない。家族が全員亡くなったのか。或いは、他所の地域から陸前高田市内へ流されてきたのか。当時、安置所は多数あったので、まだ家族が辿りつけていないのかもしれません。ある安置所では、友人と対面された男性が「やっと会えた」と涙を流されていました。そのすぐ後に遺体のファイルをめくり行方不明の別の方を捜しています。それが日常です。

《困っている人に》

震災に対しどうすればいいのか。手伝いに行けない人はどうすればいいのか。慈恩寺さんのご住職は仰っていました。「人を助けるために普段からモノを集めておいてほしいのです。タオル一枚が、水一本が重要になります。だから、少しでもいいから蓄えていてください。そして、困った人があったり災害があったりしたら提供してあげてください」と。

《寄り添い》

これからは「僧侶としてやるべきことは何か?」を探し続けて活動を行っていきたいです。

合掌

※慈恩寺：岩手県陸前高田市広田半島の先端、泊（とまり）地区にある。臨済宗妙心寺派。

和合（わごう） 岸野亮哉

●きしの りょうさい＝1974年京都市生まれ 大谷大学文学部仏教学科卒 僧侶、写真家。浄土宗西山禅林寺派専修寺副住職、日本写真家協会会員。

滋賀に宿る"時"の流れ

〈文化『過去・現在・未来』―①〉

高城 修三
小説家

今関 信子
児童文学作家

森 建司
循環型社会システム研究所
代表

琵琶湖のほとりで育まれた未来への思い

大津に居を構え、作家として、また「抱きしめてBIWAKO」の実行委員として活動するなど、市民自治の芽を育んできたことでも知られる高城修三さん。旧知の仲という今関信子さんを交え、森代表とともに、琵琶湖のほとりに脈々と受け継がれる歴史と今を語っていただきました。

■琵琶湖ホテル／大津市
■2011年4月

天智天皇と織田信長、琵琶湖に魅せられた革命児たちの眼力

……我が国に天皇中心の律令国家をつくろうとした天智天皇と、戦国乱世を平定して中世社会を近世、近代へと大転換せしめた織田信長は、日本史に画期をしるす革命的政治家であったが、その二人が、九百年の時をへだてて大津京と安土城を湖畔に築き、近江を天下の中心にしようとしたのも、湖と街道がつくる近江の特質を看破していたからにちがいない……

高城修三著『琵琶湖のある風景』より

森　高城さんの書かれたものを拝読しまして、今さらながら近江の地の歴史的価値を思わされました。日本史に名を刻む風雲児たちが、琵琶湖を眼前にどのような国づくりを思い描いたのか。想像するだけでゾクゾクします（笑）。

高城　日本の歴史で最も大切なことの一つは、律令体制を築いたということです。体制の基礎を作ったのは天智天皇ですが、この人は奈良の飛鳥から近江の大津へ都を移しました。それともう一つは、信長によって安土城を拠点に新たな国づくりがなされようとしたことです。天智天皇の大津京も、信長の安土城も、わずか5、6年で戦火により焼失し、彼らの夢も潰えたわけですが、私はこの天智天皇と織田信長が日本の二大革命家だと思っているんです。そして最大の要点は、この二人が揃って近江の地に着眼したということと、近江の地が二度も大事な機会を失っているということなんです。さらに近江が日本仏教の発祥地であることを併せて考えると、日本の歴史を語る上で、近江を抜きにすることは有り得ないと思います。

森　なるほど。歴史舞台となった土地は全国各地にあるわけですが、近江は格が違うと、そう考えて良いわけですね。

高城　例えば金沢は加賀百万石といわれ、その観光資源は近江に比べ、より豊かだと思う人が多いかもしれません。しかし、歴史的に見れば金沢は江戸開府からの400年間にわたって城下町として栄えたという話ですから、それと2000年の歴史を誇る近江の地を同列に語るのはおかしいと思います。

今関　高城さんはこの話になると物凄く雄弁で、聞く側はまるで叱られているような気になるんです（笑）。以前、町おこしや町づくりの観点から高城さんに意見を求めた行政の方たちが、あまりの迫力に震え上がっておられましたから。

森　私も郷土についての歴史的認識の甘さを反省しているところです（笑）。行政の方々だと、滋賀県全域まんべんなくという姿勢で意見を求められるでしょうしね。

高城　そうなんです。しかしそれは土台無理な話で、歴史舞台として突出した地域と、そうでない地域を平準化して考えようとするから、おかしなことになってしまうのではないかと思います。

森　かえってそうした配慮が、地域の魅力を伝えきれていないという結果を招くことになりかねませんね。

今関　行政の審議会等で高城さんと同席して、高城さんがお怒りになることによって、私の場合は高城さんがここ

まで情熱を傾けて伝えようとされていることは何なのか。つまり私たちが考えるべきことは何なのか、その焦点が段々と絞られてくるような気がします。

”売れる“文化で町おこしは、本物に成り得るか？

「日本の歴史を語る上で近江を抜きにするのはありえない」高城氏

今関　昨今の町づくりは地域文化をいかに経済活動に結びつけるか、という方向性で考えるでしょ。その際、長浜の黒壁ガラスが成功事例として持ち出されることが多いのだけれど……。私はそれだと、売れるかどうかが一つの基準になっているようで、売れないものは価値がないと言われているような気がして、それが少し気がかりでもあります。

森　私もそれは感じます。そもそも文化と経済の両立の困難さを、我々地方の経済人は、例えば地場産業を通じて痛感しているわけです。しかし、悲観ばかりしているのではなく、打開策を講じるために、そのアイデアを何から読み取るべきか、それを模索しているのですよ。

高城　ただ文化と経済というのは、今、急速に融合しつつあります。つまり、文化を排除した経済というのは、今後は成り立ちにくいということです。産業化社会では、森さんが言われるように両立しないことも有り得ましたが、ポスト産業化社会でそれは有り得ないのです。ただしそこに、きちんとした目的意識が働くかどうかはまた別の問題で、漠然と両者を結びつけてしまうようなこともあるかもしれません。

今関　今までその地域に無かったものを持ち込んで、地域を刺激したいわけですよね。それが一過性ではなく、半永久的に地域に根付くことって難しい

「地域文化と経済活動って？」今関氏

のでしょうか。

森　私もよくそれを考えます。黒壁でいうと、観光というものをどう定義するのか専門的なことはよくわかりませんが、人工的に後付けしたものが、果たしてその土地に根付くだろうかと。

高城　黒壁については集客数や長浜の認知度からいっても成功しているといえるのではないでしょうか。また、後付けしたものであっても、根付く場合は必ずあります。だって、歴史を遡れば何でも最初はそうなんですから。しかし根付くためには、それに携わる人材であるとか能力であるとか、また別の要素が関係してくるわけです。

森　その要素が充分に揃ったものだけが、やがて文化へと昇華するのでしょうね。ところで私としては、行ってみたい町づくりより、住んでみたい町づくりを推し進めるべきだと思っています。長浜は今や年間約２５０万人の観光客でにぎわい、そんな町おこしの成功例は全国でも稀有でしょう。しかし、それでも地域としては、若者の流出に歯止めがかからないのです。浜縮緬などの地場産業が壊滅的な状況にまで落ち込んだことが、大きく影響していると思います。やはり地域の中で、消費者と生産者を分けて考えるのは難しいことで、理想をいえば、地場産業の復興と地産地消の振興の一体化が望ましいわけです。

「住んでみたい町づくりを」森氏

安物と本物を隔てる要素

森　消費と生産を一体として考えると、安物買いは国を滅ぼしかねないと思うのです。中国製品に対抗しようと思ったら、結局国内でも、中国人に支払われる賃金と同程度で雇用しなければならないということですから。

高城　今、日本だけでなく世界中が中国から安価な製品を買っているといえます。そこで考えるべきは、中国人労働者と同じような仕事をしている人は、給料を下げられるということです。同じではない仕事、例えば公務員の仕事をしている人の給料は下がりません。同じような仕事をしている限りは、競争が付き物であり、それは中国であっても、今後競争相手が現れる可能性は大いにあるのです。

森　なるほど。しかし過度な価格競争を招くのは、消費者にも責任があると思うのですが。

高城　ただそれだけではないでしょう。消費者は安いものだけに走るということは絶対にありません。安いものと良いもの、この使い分けを必ず行っています。そこを見落として、生産者側が（消費者は）安いものに飛びつくという見方をしてしまうのは問題があります。なぜならそれによって、消費者が欲しいものがないという状況を生み出してしまうからです。私たちは欲しいから買うのであって、安いから買うのではありません。今はちょうど、高いお金を払ってでも欲しいものがあまり無いという状況ではないでしょうか。

森　確かにそうですね。

高城　高いお金を払うからには、圧倒的な質の良さであるとか、それだけの理由が必要になってきます。しかし、技術の進歩により、これまで高級品とされてきた品物と同等の品質をよそでも生み出すことが可能になってきました。そうした事実を認めることも必要です。

森　世界のレベルを冷静に見極めるということですね。

高城　ヨーロッパの有名ブランドにしても、生産拠点は中国というケースが増えています。ですから、精巧なコピー商品を作る技術が中国にあるのです（笑）。こうなってくると、安物買いとは一概に言えません。しかしそれでも本物と偽物に分かれるのは、これはもうブランド力やデザイン力にかかっているのです。それがあるから本物になるのだと。考えてみれば複雑です。

土地を知ることで、滋賀の独自性が見えてくる

森　同じことが町づくりにも言えますね。何を地域の宝として守り伝えていくのか。本物を見極めるのが大事だということでしょうね。

高城　そうですね。私はこの場合の本物というのは、独自性だろうと思います。それに加えていうならば、かけがえのなさです。

森　たとえば滋賀県ですと、高城さんが言われたように歴史の中で二度も都となる機会を得た土地である、ということが独自性につながると思うのですが。しかしその前に、なぜそうした機会を得たのか、本質的なものに迫れていないというのが、滋賀県のアピール力の現状ではないでしょうか。

高城　天智天皇と織田信長、二人の革命家がこの地を拠点にして日本の国を動かした。こうしたことを知らずに滋賀県の独自性をとやかく言っても、答えは見つからないだろうと思います。戦国時代に頂点に立つということは想像し難いほど命がけの行為であり、また並外れたセンスが問われます。この国で二度しかなかった巨大な革命のどちらもが、なぜこの滋賀で起きようとしたのか。それはこの土地に素晴らしいものが宿っているからです。

森　そうすると、我々は郷土について理解が足りないということになりますか。

深く、鋭く、篤く……近江に魅せられた三氏

高城　ひとことで言えば、琵琶湖をはじめ、それだけ土地に魅力があったということになるのですが、私としては滋賀県の人が自分たちでもう少し勉強してもらえればと思います。

森　あまりに有名な偉人の夢が眠っているのですからね。これはちょうど、国際社会の中で、日本人が日本についてあまり知らないのと似ていますね。

高城　まさにそうです。人間は意外と、自分に与えられたものは大切だと思わないのです。

園城寺（三井寺）観音堂より、すぐ北に大津京があった

積み重なった歴史の層の上に、人は今を生きる

今関　高城さんが書かれたものの中には、滋賀の風景を通して、人間の深みであるとか陰影のようなものを表現されているものがありますね。

高城　やはり影がなければ立体感は出ませんから、それは絶対に必要なのです。ですが、滋賀の風景というよりは、背景にある歴史を通してと言ったほうが近いですね。額田王がいて、最澄がいた。そういった歴史があるからこそ、人間について語れるのだと思います。もし、その土地に歴史がなければ、風景の美しさを語る以上の言葉は、自分の中から出てこないだろうと思います。例えば、サハラ砂漠の真ん中に立ったとしても、圧倒的な砂の量に心を動かされることはあるでしょうけれど、それ以上は何もないと思います。滋賀県の人だって、例えば三上山を眺めるとき、その山姿だけを見ているのではないでしょう。

森　ムカデ退治であるとか、天保一揆であるとか、やはり何かしらを連想しているかもしれません。

高城　そうでしょう。山裾には老蘇（おいそ）の森があり、中山道の鏡宿がありと、そうしたものを思いながら眺めておられるのではないですか。

今関　そうですね。考えてみれば面白いですね。そうした何かを共有する感覚というのが、町づくりの仕掛けにつながるのではないかという気がします。実は今、年配の方々と一緒に紙芝居を作っているところなんです。それで、ご自分の住まわれている地域を手がかりにして、何か物語を考えてみてくださいという課題を与えました。すると、各々の土地の歴史なり地名なり、自分が何に心惹かれたかということを、とても熱心に話してくださるんです。どなたもイキイキとしておられ、私としてはその様子を見るのが一番面白いんですね。知るということが活力になっていて、生活が楽しくなるというのは、こういうことではないかと思います。

森　知ることで自分の幅が広がるんですよ。積み重なった歴史の層の上に、自分は今を生きているんだと。それだけでも意識が変わるでしょうね。

今関　信長にしても、西洋の文化を例えばセミナリヨ（神学校）のような形で日本の国に取り入れようとしていたわけですよね。信長はこの国に刺激を与えようとしたのだと思います。長浜の黒壁にしても、これまで営々と続けてきた自分たちの生活に、ガラスという異質なものを取り入れたのは、何か化学反応のようなものを期待されたのだと思います。

高城　そのとおりでしょうね。長浜の土地で化学反応を起し、どれだけ独自なものを生み出せるか。つまりそれは、どういった人材を得られるかということでもあると思いますが。江戸後期、薩摩藩にガラス製造の技術が伝わり薩摩切子となっていったように、長浜の黒壁ガラスもそこまで辿り着けるかどうかです。

森　私はその道のりに、高城さんが言われたような歴史を通じてものを見る目が生かされればと思います。我々も歴史の一部ですから、未来へと物語を書き進めなければ。本日はお二人ともありがとうございました。

文化を知ることから始まる（近著を手に）

大樹の声を聴く 高城修三

●たき しゅうぞう＝1947年香川県高松市生まれ。京都大学文学部卒業。1977年『榧の木祭り』で新潮新人賞を受賞、翌年に同作で芥川賞を受賞。1979年に京都から滋賀へ転居。1987年に実行された「抱きしめてB-WAKO」では、計画当初から実行委員を務める。また連歌宗匠としても活躍。

〈主な著書〉『糺の森』『約束の地』『苦楽利氏どうやら御満悦』『京都伝説の風景』『紫の歌』『大和は邪馬台国である』『紀年を解読する』『百歌繚乱』『可能性としての連歌』『神武東征』『日出づる国の古代史』ほか

日出づる国の古代史
～その三大難問を解く～

●発行／現代書館
●価格／3200円＋税
●内容／古代史の難問を芥川賞作家が見事解決！教科書が逃げた日本の歴史がここにある。歴代の宝算（天皇の年齢）を春秋年で解決。

共に生きてこそ 今関信子

●いまぜき のぶこ＝1942年、東京生まれ。東京保育女子学院卒業後、幼稚園教諭となる。7年間保育者として働いた後、創作活動にはいる。日本児童文学者協会理事。

〈主な著書〉『小犬の裁判はじめます』1987童心社 青少年読書感想文コンクール課題図書。『さよならの日のねずみ花火』1995国土社 青少年読書感想文コンクール課題図書、厚生省中央児童福祉審議会推薦文化財。「地雷の村で「寺子屋」づくり」2003PHP研究所など多数

勇気凛々 いの壁を打ち破れ 森建司

●もり けんじ＝1936年滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州（株）取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会相談役など

〈著書〉『吃音はなおる』遊タイム出版、『循環型社会入門』新風舎、『中小企業にしかできない持続可能型社会の企業経営』サンライズ出版。

農的生活からみる幸福論

〈文化『過去・現在・未来』―②〉

山崎 隆
麦の家

池田 喜久子
池田牧場

森 建司
循環型社会システム研究所
代表

大津市坂本比叡山麓にて自給自足を実践する「麦の家」主宰の山崎隆さんと、東近江市で飼っている乳牛からとれる乳をイタリアンジェラートとして商品化したり、農家レストラン「香想庵」を運営する池田牧場の池田喜久子さんを迎え、持続可能な社会としての農的生活に見る幸福感について伺いました。

■山科おらがそば安兵衛
■2011年3月

農的世界の実践―麦の家での暮らし

山崎　私は、比叡山の麓で、田畑を耕し米、野菜を作り、蚕を飼い、糸を紡いで織物を織り、草木で染めて衣を作っています。また、昔ながらのかやぶき屋根の家に住み、庭先ににわとりを飼っています。家族を軸にして、自然の流れの中で〝衣食住〟をできるだけ自分たちで賄う自給自足的な暮らしをしています。

この土地は、以前はジャングルのような薄暗い谷間でしたが、終戦の年に先代がここに居を構えました。当時、日本中で、今回の大地震に匹敵するような価値観の変化が起こっていました。それまで培ってきた精神文化が全て崩れてしまった。さあ、日本、どうするかという中で、先代は、全国行脚をするなど求道者的なところがあり、国や文化に対する思いが強い人でしたが「耕して食べることが原点である」と、現在の場所に移り住み田畑を耕し始めたのです。麦の家の基本は、ここにあります。

麦の家では、生き方として、自然環境を尊ぶ、文化を大切にする、平安に生きるという三つの柱を掲げています。

一つは、自然や風土が軸にあります。人間も自然の小さな一員であり、自然風土の中で人間が生かされています。

二つめは、人間の英知を尊ぶ生き方です。人間にはほかの動物と違い、人間固有の叡智があります。いきすぎないよう制御することもその一つです。

三つめは、よろずの世界がすべからく平安に生きられるようにとの思い「平和主義」です。こうした考えを形あるものにしようとしているのが「麦の家」です。現在、私たち夫婦2人に子どもが3人、1人は結婚し孫が2人いますので三世代8人で暮しています。

日本の精神文化は〝米〟からきているとの考えから、毎年春には「お田植祭」秋には「抜穂祭」正月には農業・環境・文化などについての講座を、社会的な広がりの中で行っています。

このような暮らしを私は〝農的な暮らし〟と呼んでいます。しかし、決して農業だけでなく、織物、建築も行います。建物は息子たちが中心になってやって

お田植祭事―参加者全員が古式に則り五穀豊穣への祈りを捧げる（麦の家）

大きな「要石（かなめいし）」。
山の神が宿る神聖な石（麦の家）

稲の刈り取りも手作業
で、抜き穂祭（麦の家）

います。家族みなで、暮らしを伝承し、三世代が朝から晩まで楽しく暮しています。

現代社会では、モノがあればいい、少しでも便利ならそれでいいと、経済で豊かさ幸せを計ろうとする傾向があります。昭和35年あたりから、日本中がそこへ向かって走った。

そんな中、私は農家の生まれですから、農業とは何かということをずっと追いかけていた。私の現在のライフスタイルは、私にとっては豊かで幸せです。

幸福感の第一は、いのちがつながることです。どんな生命体でも、植物なら、花が咲き、実を結び、種が落ち、芽が生える。動物なら、つがいになり子を育む。人間も同じです。社会全体として子どもそして孫を宝として次世代へいのちをつないでいきたい。

六次産業の実践―池田牧場の展開

池田　池田牧場は、昭和31年に先代が乳牛2頭を飼い、乳を搾ったのが始まりです。結婚当初は朝起きると、牛に餌をやり、牛糞の処理をし、搾乳をしてから朝食をいただき、昼はひたすら牛の餌となる牧草畑で草刈りです。夕方も餌やり、牛糞処理、搾乳を済ませてから我々の夕食です。ほんとうに体力勝負の毎日でした。昭和50年ごろより、日本の経済政策として、自動車や家電を輸出し、穀物輸入が進められた結果、牧草が外国から入ってくるようになりました。それまでは乳牛を飼育するためには、牧草地を確保しなければならず、なかなか増頭することができませんでした。ところが、飼料や牧草が安く手に入るようになり、容易に乳牛の数を増やすことができるようになりました。昭和57年ごろになると需要と供給のバランスが崩れ生産調整が始まりました。出荷先の農協から「牛乳はこの量しか買取れません。あとは捨てて下さい」といわれ、毎日搾った乳を畑に捨てるようになりました。

乳牛から、1リットルの牛乳をとるのに、牛の身体で5リットルの血液を作らなければなりません。母牛は、赤ちゃんを産んだ直後には、約40キロリットルの乳を出します。つまり、２００キロリットル（ドラム缶1杯）くらいの血液を、乳を作るために一日で作ります。母牛が子牛に飲んでもらうためにやっと作った乳を人間が取っているのに、穴を掘って捨てる。「この状況を誰が知ってくれているのだろう、牛にどう言うたらいいのだろう」と辛かった…。

その後、規制を一つずつ崩していき、アイスクリーム（イタリアンジェラート）を作りはじめました。お客さんにアイスクリームを買って頂いて「美味しかったわ」と言ってもらえると嬉しくて、「牛に伝えておきます」と応えていました。

おかげさまで消費者の方々との距離が近づきました。お客様と牛や農業の話をたくさんしました。大勢の方が集落内の牧場に来てくださるようになりました。これ以上集落の人たちに迷惑がかかると申し訳ないとの想いから店舗の移転を計画しました。その時に、農業者として「生産だけではあかん。もっと消費者の方々に生産者の想いを

❶タイムトリップしたかと…（香想庵）

伝えていかなあかん」と気づきました。そこで生産者の想いが消費者に届けられるよう、”食べる“を大切にした、農家レストランも計画に入れました。

近年、里山にも鹿がドンドン増えています。農家は鹿の獣害（作物を食べられる）で生産意欲を喪失しつつあります。有害の鹿を殺すのだったら、殺したいのちは人間がキチットいただくのが、筋ではないでしょうか？　野菜のいのちも人間がいただいています。食事の前に手を合わせて「（いのちも食事も）いただきます」。この意味がわかる店をつくろうと思いました。

平成15年秋に、山中に移転したジェラードショップの横に、私の生まれ育った実家を移築し、農家レストランをオープンしました。旬の野菜と鹿肉のローストをメインに使い、思いのいっぱい詰まった料理を作ったのですが、近所の人に「これは夕べお母ちゃんが作った料理や」と言われたこともあります。田舎のご馳走を提供したいと願っていましたが、地元で採れた野菜料理を並べることでいいのか？と悩みました。

❷笑顔の看板娘おもうさん。あられは手創りでやさしい味わい　❸かまどで炊くご飯は香ばしい　❹季節ごとの旬の味わい
❺メエ～羊です（香想庵）

時が経つと、”獣害の鹿をいただける店“”地産地消の野菜をいただける店“として少しずつ認知してくださるようになりました。3年が経過すると経費分くらいの売上になり、5年目でようやく減価償却できるところまできました。

森　中小企業は、口コミで評判が広がる、それが一番強い。今では六次産業などといって、池田さんのように運営されているところが増えてきました。

農発信の運営

池田　アイスクリームの製造、農家レストランの運営と、事業が展開するにつれ、野菜を生産するところまで手が回らなくなるのが悩みですが、姉が専属で作ってくれています。

看板娘の「おもうおばあちゃん」が手づくりのあられを炭火で煎っています。元気なんですよ。お客様とのお話が大好きで、応対も上手です。

森　事業規模を大きくしないほうがいい。店に行くと池田さんが居て、挨拶してくれる。これでお客さんは満足する

“農”から発する・・・山崎氏

んです。人を雇った方が経営者としては、成功するかもしれないけれど、マニュアル教育された女の子が店番しているような店は面白くない。

山崎　池田さんの思いは、農から発している。ものづくりは、素材がいのちです。この鹿は、この山であの猟師さんがとってくれた鹿だとわかると、お互いが納得し腑に落ちる。事業規模を大きくするのではなく、志を大事にしながら、継続していくことが大切だと思います。

池田　私には農しかない。乳加工のジェラード店の運営は、娘夫婦が後継してくれています。私は、農家レストランの看板ばあさんになれればと思っています。

農業はいのちの生業

森　現在、東北大震災の影響で、東京に出ていた人々も、地方に帰る時代です。明治の初めは、東京よりも新潟などの方が、人口が多かったと聞きます。農業など一次産業に人が集まっていた。それが工業化社会になると、稼ぎがいいからと都会へ人が集まるようになった。

企業は、ライバルに勝つために、コストダウン、品質管理、供給体制を徹底する。その中で犠牲になるのは、人間です。労働力としての人間は、コストダウンの対象となり、効率を上げ、労働力を削るために、機械化が進みました。

それから、工業化社会は消費者をコントロールし、広告宣伝などで購買意欲を導いていきます。家さえも、メーカーの商品になり消耗品になった。経済社会の良さは、現金収入が多いことで、確かに、身体は楽になりました。

そんな時代の流れの中で育った都会の若者が地方へ来たときに、「僕は地方で暮せるだろうか」ととまどう。自給自足を知らないから、現金を持たない暮らしが想像できない。そこで、農的生活を実践しておられるお二人に伺いますが、人間の幸福とはどのようなものだと思いますか?

池田　先日、今回の震災にあった知人と連絡を取った際、最後に「私のところ

おてんとさん・・・池田氏

は農家だから食べるものは心配しなくていいよ」と言われた言葉が印象的でした。農業をやっていてよかったと思いました。

また、被災した知人の1人は福島の避難区域内で牛の繁殖を生業としています。「牛を捨てて行けない」と今も牛と残っておられる。この強さは農業ならではだと感じました。

山崎　農業者は、自分の生業がいのちそのものです。お米も野菜もいのちです。そのいのちを日々育んでいるからこそ安堵があり、人間として幸福が実感できます。農業とは、常にいのちと向き合うということなんですね。

森　今回の震災で、お金を持っていても、買う商品がないという現象がおきました。

山崎　お金さえあれば食べ物がいつでも手に入るという世の中ができている中で、今回の震災、原発事故が起き、はじめて人間は本当に大切なものに気づいていたのです。生きるとは、家族とは、自然とは、豊かさとは、持続可能な生活とは何かということに…。

テレビのインタビューに答えて「テレビも車も何もいらない。家族がもう一度一緒になりたい」と泣いて言った人がいた。これが本当ですね。

森　人間の根源的な生活ですね

おてんとさまが見とうよ

池田　よほど自分に筋を通しておかなければ（信念を崩さない）ダメですね。ジェラードでもちょっと気を抜くと安い材料がいくらでもある。池田牧場では、数種類の味のジェラードを製造していますが、味の素材となるサツマイモやブルーベリーを買ってきてすり潰さなくても、ピューレが売っていますが、あえてひと手間をかけてやる。レストランでも冷凍食品を使いたいところですが、ひと手間、ふた手間かけてやる。これは、目に見えないことであり、信念があるからできることです。

コストダウンは・・・森氏

森　コストダウンを追求する工業製品の世界とはまるで逆ですね。

山崎　現代社会が混迷してきた原因は農村が崩壊したことにあります。〝真善美〟が大切で、これが真だ、この人はいい人だ、これは美しい、そういった価値観が無くなっていった。また、都会での生活は、地域とのつながりが薄れ、核家族化による単一世帯だけでは、暮らし、家風、祈り、もったいない、ほどほどに…、そういった人間の機微がなかなか伝わらない。

大自然は恐ろしい力を持っています。人間がどうこう言ってどうにかなるものではない。人間も自然の一部で、小さきもの。

そういうごく当たり前の”真善美“の価値観は、農村集落で人とつながり農業をしながら自然の中で生きていれば、満ち溢れています。かつての「惣村」的な風土を生かした地域社会の再生が必要だと思います。

森　お日様が出ていたら拝むということを昔は当たり前にしていた。

　原子力発電所は完璧だと思っていたが、あんなに簡単にだめになる。自然の力がいかに大きいか。「生かさせてもらってありがたい」と自然に手を合わせる姿は、人間本来の姿だと思う。

池田　私は、実家のおばあちゃんに「おてんとさんが見とうよ」と言われて育ちました。いいことも悪いことも、していることはみな、おてんとう（お天道）さんが見ているよと。

山崎　テレビで今回の大津波を見ていても、「どうぞ早く収まってください」と祈ることしかできない。

森　科学の力でなんとかしようという発想ではなく、これからは自然の中で生きていくことを考えたい。

農業はお母さん

森　僕は子どものころ、畑をやれといわれても嫌だった。しかし、自分がまいた種が芽を出し育つと嬉しいものです。

山崎　農業は経済ではない。いのちの基である食を支えるもの。池田牧場さんのように、乳牛を飼い、牛乳を販売する仕事は、農業というかけがえのないいのちの生業を理解し、他の人のいのちを支えている。自分の見える範囲の素材、自分が管理している牛、自分の目の届く範囲の人に作ってもらっている野菜を使う。大地に足をつけ、根っこを張ればそれは真実の生き方です。

池田　大地から外れられないのが農業者ですね。農業は、循環します。葉がだめになっても腐らせると堆肥となる。

森　多角化ができるのも、農業の面白さですね。農的生活、六次産業には、非常に喜び楽しみがある。

山崎　農業は、いのちの生業。いのちを授かり、支える生き方そのものです。自然に対しさまざまな表現をしていく。水田の緑や実りは安堵感を与えてくれ

老若男女一体となり早苗を植える―いのちがつながり、暮らしがつながる（麦の家）

これからも語り続けます・・・三氏

る根源的な役割を持っており、人間文化の根源だと思います。

池田　農業と母親は一緒なんですね。大切に育てたらきちっと答えてくれる。子どもも牛も沢山増やし、母親のような気持ちでやっていけたら世の中もっとあたたかく暮していける。

森　それが持続可能社会の原点になるのでしょうね。今日は盛りだくさんの楽しいお話をありがとうございました。

乾坤一蛰　麦の家　山崎隆

●やまざきたかし＝1948年富山県生まれ。1967年農業に基づく戦後復興運動「萬世協会」の指導者松井浄蓮師（大津市）に師事。公務員を経て1994年「麦の家」を主宰。比叡山山腹で田畑を耕し育った蚕から織物をつくり昔ながらの葭葺き屋根を守る。

農は母　池田喜久子

●いけだきくこ＝池田牧場運営

●池田牧場
滋賀県東近江市和南町2191
TEL 0748-27-1600
FAX 0748-27-1626
http://www.ikeboku.com/

●農家レストラン：田舎の親戚『香想庵』
〒527-0213　滋賀県東近江市和南町1572-2
TEL 0748-27-1111（予約専用）
〔営業時間〕午前11時～午後3時（定休日：水曜日）

●ジェラートショップ『香想』
〒527-0213　滋賀県東近江市和南町1572-2
TEL 0748-27-1600
〔営業時間〕午前10時～午後6時（（定休日：水曜日）／11月～3月は午後5時閉店

生乳100%のイタリアンジェラード（香想）

M・O・Hレポート1
〈文化『過去・現在・未来』―③〉

届けたいのは本物への情熱

横田 千洋

有限会社しいたけブラザーズ　代表取締役社長

原木しいたけ栽培に取り組む家族の物語

日本のしいたけの約9割が、おがくずなどに栄養を与えてしいたけを育てる菌床栽培であるなか、無農薬の原木栽培にこだわる3兄弟が岐阜県にいる。その名も「しいたけブラザーズ」。濃厚な香り、プリプリの食感は評判で、店舗には全国からファンが訪れる。だが、そこにたどり着くまでには、数々の試練があった。原木栽培に情熱を捧げる父、その父に反抗する息子たちの葛藤、そして決断。事業成功の裏にある、「家族の絆」を取材した。

■岐阜県
■2011年4月
■取材：荒木美晴

これが食べごろ

しいたけのイメージを覆す衝撃の味！

ふわっと口のなかに広がる芳醇な香り、弾力があるのに歯切れのよい食感――。

まるで上質の近江牛を食べた感想のようだが、そうではない。丹精込めて作られた、「原木しいたけ」を初めて口にしたときの感想だ。

岐阜県加茂郡川辺町で、昔ながらの無農薬の原木しいたけ栽培をしているのが横田家の3兄弟。代表取締役社長で次男の横田千洋さん、長男の尚人さん、三男の泰弘さんである。「しいたけブラザーズ」というインパクトあるネーミングも相まって、"本物"の味が高く評価され、いまや知名度は全国区だ。

妥協はしない。本物にこだわるしいたけ作り

原木しいたけは、樹齢20～25年のクヌギやナラなどの広葉樹を1mほどに切りだし、しいたけの菌を接種して栽培

❶原木の積み方は芸術的。元気な木の子が顔をだして　❷菌を入れる丸い穴　❸「オメザ（お目覚）ですよお～」稲妻（衝撃）と雨（水）で菌は覚醒する

「いつも触れているんです。原木の元気がわかるように」横田千洋氏

するもので、木の養分のみで育つ。あの豊かな風味は、森の香りなのである。

現在、しいたけブラザーズでは、露地栽培5万本、ハウス栽培15万本の計20万本を管理している。桜の花が咲くころが旬といわれ、最盛期には2日間で1t以上を収穫。年間生産量は50tに及ぶ。

原木栽培はとにかく時間と手間がかかる。しいたけ菌が均等に原木内にまわるように、1本5〜10kgにもなる原木を1日に2000〜3000本も組みなおす。千洋さんのたくましい上腕とマメだらけの掌は、あたかもクライマーのようだ。

気温や湿度が生育の鍵になるだけに、ハウスでは床暖房を設置。昼夜の温度差や湿度を徹底管理している。取材時に、ハウスから出した木をコンテナごと壁に衝突させて衝撃を与え、水につける作業を見せてもらった。これは、ハウスのなかで眠っていた菌を起こすためのもので、昔から伝わる〝雷が落ちたところの周りには美味しいしいたけができる〟状況を再現しているのだという。

子どもも安心して食べられる「木の子」

過去には、標高が高い農場で、3000本が雑菌で全滅してしまった苦い思い出もある。このとき、千洋さんは突飛な行動に出た。原因究明のため、なんとハウスのなかにベッドを持ちこみ、しいたけと寝起きを共にし、観察したのだ。そして、ついに原因を突き止めた。

「標高が高く、夜に気温が下がった時に雑菌がついてしまった。しいたけにとって一番快適な温度が足りておらず、雑菌の繁殖に適した温度になっていたんです。温度管理がいかに大切か、身に染みてわかりましたね」

おがくずなどを床にして栄養を与えてしいたけを育てる菌床栽培なら、大量生産も可能なうえ、労力も半分以下に減るだろう。だが、「あり得ない。

霧？森の中に迷いこんだよう。ハウスで原木はゆっくりとおやすみします☆GOODNIGHT

増収剤や殺菌剤は一切使いません」と千洋さんは言い切る。

「小さいころから親父が言っていました。”キノコは木の子だ“って。養分がなくなった木は、そのまま土に還らせて肥料にする。自分たちの子どもにも安心して食べさせられる”自信と循環型農業“を守る。それが、僕たちのこだわりですから」

父・俊光さんがアメリカで見た現実と可能性

しいたけブラザーズという名前になる前は、「ふじしいたけ園」といった。

創業者は、千洋さんたちの父・俊光さん。俊光さんは、ここ川辺町で生まれ育った。動物好きで、地元の農業高校の畜産科へ進学。同時に独自に養鶏に取り組み、若くして事業も成功させた。さらに大規模の養鶏技術を学ぶため、国際農業者交流協会の研修制度を利用してアメリカ留学も実現した。

だが、そこで待っていたのは、理想とはかけはなれた現実だった。「すべてが合理化された世界で、鶏が卵を産む機械としか思えないようなやり方だった」と俊光さんは振り返る。

アメリカとの競争を勝ち抜く力をつける必要はあったが、「動物が好き」「美味しい卵を作りたい」という自分の理念だけは曲げたくなかった。

一方で、養鶏にはない”可能性“も見出した。アメリカでニーズがあった七面鳥を見て、日本でもそのマーケットが増大することを確信。日本で七面鳥牧場を開くことを決意した。

「このログハウスは女房への誕生日プレゼント。私が作りました」横田俊光氏

絶望の間に光を与えた長女の一言

ところが、その熱意とはうらはらに、帰国後は厳しい現実を突きつけられることになる。俊光さんが不在の間に、日本では食の自由化が進んでいたのだ。仕入先にと考えていた卵やヒナの会社はことごとく倒産。ホテルなどにも外国産の冷凍肉が出回り、完全にそのあおりを食ってしまったのだ。

妻も幼い子も養わなければいけない。"もう一度、養鶏をやるか？"と、俊光さんは苦悩した。だがそんなとき、たまたましいたけを栽培するためのほだ木を手に入れることになった。ほかには何もない。俊光さんは心を決めた。

「原木しいたけ栽培をやろう」

収獲できるしいたけができるまで、2年間はかかる。毎日、しいたけのことだけに集中した。栽培が軌道に乗るまで、俊光さんは子どもたちと一緒に川で魚を獲って飢えをしのいだ。

「このころ、長女の瞳が初めて話した言葉が"あった、あった！"でした。しいたけを見て、そう言うわけです。田舎で生きていく勇気をくれた言葉でしたね」と俊光さん。

緊急事態をきっかけに人生を見つめなおした次男

「そういう親父の気持ちを知らずに、僕らは育ったんです」とは、四男二女の6人きょうだいのなかで一番"やんちゃ"だった次男の千洋さん。「昔からしいたけは大嫌いだった。仕事を手伝わないとおやつもご飯ももらえないルールで、逃げる方法ばかり考えているような子どもでした。夢は特にないけど、しいたけ農家にだけは絶対になりたくなかったんです」

実家から少しでも離れたいと、千洋さんは県内の寮がある高校へ進学。バスケットボールに打ち込む青春時代を過ごした。高校卒業後は、岐阜市内にあるアパレルメーカーに就職。「1階がオフィスで2階が作業場。2階でやっているのは、スーツの『made in Korea』のタグを『made in Japan』に付け替える作業でした。今なら偽装表示で大騒ぎでしょうが、当時はまかり通るような時代でした」

就職から1年が経った頃、実家が緊急事態にあると連絡が入った。父・俊光さんがギックリ腰で倒れ、母・喜子さんもケガで入院してしまったのだ。このとき、兄は北海道におり、弟はまだ高校生。仕方なく、千洋さんは仕事が終わってから実家へ行き、父の指示を受けながら作業を手伝った。「あんなに嫌で仕方なかったしいたけの手伝い。でも、体が覚えていました。不思議な気持ちでしたね」と千洋さん。

ちょうど同じころ、父が手掛ける原木シイタケが中国産や菌床しいたけに圧されているという話を耳にした。だが、父は断固としてこう言った。「絶対に、菌床しいたけには手を出すな。木の養分をもらっていないキノコなんて、本物じゃない。儲けだけを考えるな」

その話が、千洋さんには自分が売っているスーツと重なって聞こえた。「後ろめたい思いをしながらの商売はやっぱり辛かったんです。親父のように、

しいたけブラザーズを育てた里

本物にこだわりたいと思いました。会社を辞めたのは、そのあとすぐです。〝オレがしいたけ屋を継いでやるよ〟と言って、実家に戻りました」

父と同じ制度でアメリカ留学へ

ところが、幸か不幸か、千洋さんが実家に戻ったとたん、父・俊光さんの腰が治った。「これで母も復帰したら、自分の居場所がなくなってしまうじゃないかと。そこで、僕は親父が若いころに行っていたアメリカ留学をすることにしたんです。親父と同じ制度を利用して、野菜について学んでこようと」

しかし、千洋さんもまた、アメリカで衝撃の光景を目の当たりにした。セスナ機で大量の農薬を畑に散布する様子、ワックスでピカピカに光った野菜たち。「こんなもの食えるか！って心底思いました。ちょうどそのころ、祖父が生死をさまよっていたこともあって、帰国したら絶対に安心して食べられるしいたけを作ってやるって誓いました」

2年間の留学を終え、千洋さんは帰国。その翌年、長男の尚人さんが実家を手伝うために3年間勤めたJAを辞めて帰ってきた。尚人さんもまた、職場で扱う菌床しいたけの安全性と、定時を待つだけのサラリーマン生活に疑問を持っていた。「親父は朝から晩まで働き、しいたけに愛情を持っていた。仕事ってそういうものだと思っていた。このままでは自分がダメになる」と、自らピリオドを打ったのだ。

これまで使っていた農場が道路の拡張のため立ち退く必要があったこともあり、新しい場所に農場を作りなおした。親子三人、それぞれが借金を背負っての再スタート。1998年のことだった。

試食販売で見た子どもの笑顔が自信に

とはいえ、菌床しいたけが市場を席巻していた時代。原木しいたけの需要は減る一方だった。業績は悪化したまま。無農薬の最高のしいたけだと説明しても、買値はほかと同じ。千洋さんも尚人さんも、家族を養えるだけの給料はなく、生活は「餓死寸前」というほど、困窮していた。

そんななかで彼らを支えていたものは、「本物を守る」という信念だった。朝から晩まで、顔を合わせばしいたけの話をする二人。そんな息子たちを見て、俊光さんは「お前らに任せる」と言い、見守った。

兄弟がまず着手したのは、販売ルートの開拓。まずは地元のスーパーで試食販売を始めた。はじめは、いぶかしそうに眺めていく人々。だが、ひと口食べてみると、みんなが「あれ?」という表情に変わっていった。「懐かしい味だなあ」と目を細めるサラリーマン、「しいたけ嫌いの子どもが食べてる!」と喜ぶ母親。

「そこで本当に美味しいものは、みんな好んで食べてくれるということがわかったんです。いける、と確信が持てましたね。それからスーパーのネットワークで評判が少しずつ隣町に広まっていきました」

イキイキとしいたけを売る兄を見た三男の変化

兄二人が試食販売で駆け回っているころ、三男の泰弘さんは愛知県でサラリーマンをしていた。包装機械会社に勤め、結婚もして、生活は安泰。小さいころから、優秀な長男と、すぐ上のやんちゃな次男を見て育ち、うまくバランスをとって立ちまわっていたという。兄が二人いるということもあり、しいたけには興味なし。実家のしいたけ栽培が苦労しているという話を聞いても実感がなかったし、まさか自分が手伝うようになるとは思っていなかったとか。

泰弘さんが実家を手伝うきっかけになった理由を、千洋さんが代わりに話してくれた。「弟の家の近くでたまたま試食販売をする機会があり、弟は様子を見に来ました。そのとき、イキイキとしてる僕たちの姿を見て衝撃を受けたらしいです。〝しいたけが嫌いだって昔から言ってたくせに、なんであんなに楽しそうにしいたけの説明をしてるんだろうって驚いた〟と言っていました。そのあとですね。弟が〝オレもやる〟って言ってきたのは」

だが、父の俊光さんも兄たちも、妻も反対した。安定した生活を手放すうえ、3人ともやって共倒れしたらどうするのか。苦労を知る父や兄から説得された泰弘さんだったが、「自分も兄貴たちのようにイキイキと働いてみたい」と、引かなかった。

そして、それから約2年後、泰弘さんが合流。最初こそ指示通りに作業をするしかなかったが、次第に得意な機械整備の分野で力を発揮し、なくてはならない人材に成長していった。

そして、兄弟3人が揃ったのを機に、60歳を迎えた父・俊光さんは息子たちにすべてを引き渡し、引退した。

❶ SHIITAKEはれっきとした英語です　❷数々の栄冠を受け取材も殺到　❸3青年が大志を描くパッケージの干ししいたけ。水で戻してください　❹しいたけまん。ごろんとしいたけが入ってました　❺しいたけは傘の裏を見て買おう

これからも、作り手の心が見える農業を

顧客とは直接取引が100%。今では全国の料亭や一流ホテルからの注文が後を絶たない。商売は軌道にのり、売り上げは右肩上がりだ。

加工品販売も人気で、尚人さんの妻が「しいたけまん」「しいたけカツカレーまん」を考案してヒットさせるなど、女性たちのパワーも不可欠だ。そして、3兄弟の幼い子どもたちもまた、父の背中を見ながら、たくましく育っている。

いま、父・俊光さんは「山への恩返しがしたい」と語り、尚人さんは近所の山を1ヘクタールずつ購入し、クヌギを植林する活動を行っている。

そして千洋さんは、「自分たちの代だけで終えてしまっては意味がない」と、次代の農業者の育成にも力を入れている。

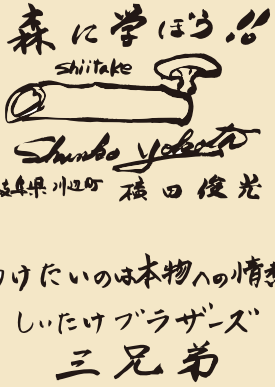
千洋さんは言う。「農業を始めて、両親の偉大さがわかりました。苦労があるから、今がある。そしてこれからも、消費者とは“顔が見える関係”を超えた、“心が見える関係”でありたいと思っています」

長女の村上瞳氏と「川で洗濯して、川に落ちてたねえ」

●よこた ちひろ＝有限会社しいたけブラザーズ 代表取締役社長
1974年、横田家・四男二女の次男として生まれる。岐阜県立岐阜農林高校卒業後はアパレルメーカーに就職。その後実家に戻り、父のあとを継ぐ。家族は妻と子供3人。

●有限会社しいたけブラザーズ
岐阜県加茂郡川辺町鹿塩9883-1
TEL 0574-53-4663
FAX 0574-53-3132
URL http://shiitakebrothers.com/

★大好評！しいたけブラザーズの「しいたけ狩り」
http://shiitakebrothers.com/taiken.html



昔ながらの四つ間どりのお座敷で、滋賀のこだわりの生産品をいただく

地域を元気に！ 地産地消
── 生産者と消費者の絆つくり

『生産者・消費者交流会』3月26日、多賀町の「里の駅」一圓屋敷で開催

長宗　清司

前号でお知らせした『生産者・消費者交流会』を3月26日13：00～多賀「里の駅」一圓屋敷で開催しました。参加者は70名、古民家に温かな人のつながりが生まれました。参加者の湖周山遊会の長宗清司さんのレポートでお伝えします。

❶季節ごとに装いを変える一圓屋敷の庭　❷一圓屋敷は多賀「里の駅」として第1土曜に直売等も行われる　❸おばあさんとお手伝いに来ていた「りんちゃん」

出会い、交流、そして絆

3月26日土曜日、「生産者・消費者交流会」に勝チャン（田中勝弘さん）をさそって、のこのこ多賀町へ出掛けました。その日の天気予報は「晴れ」なのに、何度か雪が舞う寒い1日でした。受付にはまだ時間があったので、会場近くの「野鳥の森」を再訪しました。すでに北帰したらしく野鳥の姿は見当たりません。湖面を寒風が吹いていました。

会場に着き、受付を済ませ、席に着いた私は、1歳半くらいの、おばあさんとお手伝いに来ていた「りんちゃん」と仲良くなりました。生まれて始めて他所の子をひざの上に載せて、15分ほどでしたがおじいちゃん気分で、とてもよい時間を過ごしました。

この家というのは、江戸時代の庄屋屋敷「一圓屋敷」で、昔ながらの四間取型のお屋敷。今は多賀「里の駅」として利用されています。植え込みに囲まれた池庭の脇には灯篭があり、紅梅が満開です。

❹森氏・内藤氏・今関氏から地産地消へのメッセージを聞く　❺楽農舎なごみの里観光農園 坂下道良さん　❻須原魚のゆりかご水田協議会 堀 彰男さん　❼本にごろ鮒専門飯魚 大島正子さん　❽ご来場くださった多賀町長　久保久良さん

講師の森建司さん（新江州（株）取締役会長・循環型社会システム研究所代表）のご講演、「地域を元気に、地産地消～生産者と消費者の絆つくり～」は、大変参考になりました。以前から温暖化問題、資源枯渇（石油ピーク論）、エネルギー、食糧、水問題そして原子力問題等をとりあげられ、価値観の転換を提唱しておられました。

経済至上主義社会から持続可能な社会への転換時期に達していないか。代替エネルギーか省エネかが、問われだしている今日この頃。くしくも、3月11日に起こりました「東日本大震災」（地震・津波そしてこれらにともなう福島原発の損壊）が、今日のテーマにぴったり当てはまる、グッドタイミングです。

我々凡人にもわかりやすいように話される内容に、改めて森さんの先見的見識と深い洞察力に感銘致しました。

今回の大災害が、多くの人の生き方を、競争型から共生型へ転換するきっかけになりそうだし、自然への回帰、郷土愛、家族、人と人との絆がこれから求められる大切なものになってゆく。

❶滋賀のこだわりの産品であふれたお屋敷の洋室　❷菓志工房うすなが 薄永金侍さん　❸エコワークス 清水陽介さん　❹大戸洞舎 松本とみこさん　❺多賀クラブ・K農園 栗本 泉さん　❻生産者と消費者が座卓を囲む　❼会終了後、直売所もにぎわった　❽みんなで手渡ししながら試食が行き渡る

その身近なきっかけが生産者と消費者の絆、つまり、作り手の顔が見えるといったことが主旨に思えます。

次いで、応援講師として、内藤正明所長（琵琶湖環境科学研究センター）、今関信子さん（児童文学作家）がそれぞれのご意見を発表されました。

内藤さんは学者の立場から、論理的に数字などを交え的確に説明され、今関さんは空気に敏感な子供の心理などを実体験を交え、ユーモアたっぷりに、熱っぽく話される内容は、とても説得力がありました。

このあと、多賀町長のご挨拶があり、生産者から自らが所属されるグループのPRとご自慢の食品の紹介があり、丸いテーブルを囲んで試食したのは、

「須原魚のゆりかご水田米」
「楽農舎なごみの里観光農園の鶏卵」
「多賀クラブのシシ肉カレー」
「K農園の野菜とにんじんジャム」
「ほっとすていしょん比良のユズ味噌」
「飯魚の本にごろ鮒ずしのおつゆ」
「大戸洞舎の雑穀と豆のぜんざい」
「菓志工房うすながの山芋スフレ」

生産者・消費者交流会

お客様からいただいた感想です。

★ふなずしの苦手な私でも食べることができました。どの食材もおいしかったです！
★大自然の力には人間は及ばない。自然から離れると人間が異常になっていくと思う。自然の恵みに感謝して地元の生産物を大切にし、食を通じて健康でありたい。
★本日の講演はとっても有意義でした。
★いろんな食を味わわせていただき、ありがとうございます。
★すばらしい交流会だった。ぜひ継続した取り組みにしていただきたい。

みなさまからのメッセージ

編集からお知らせ

この交流会が、湖北に飛び火しました。『よばれやんせ湖北〜生産者・消費者交流会〜』を11月19日に長浜の朝日漁協にて開催すべく準備中です。

現在、共同主催の実行委員会を立ち上げているところです。参加したい、生産品を紹介したい、会の活動をしたいという方、ご連絡ください。有志が集まっています。

【問合せ】
NPO法人木野環境　北井
TEL.075-708-8061　FAX.075-708-8062
MAIL:oubo@kino-eco.or.jp

❽

「かたぎ古香園の無農薬紅茶」量は少しずつでしたが、年寄りの腹を満たすに充分な品数で価値ある製品ばかりでした。

最後は、小谷山の北裾で店を構えておられる「エコワークス（どっぽ村）」の方が、木製サッシの説明とエコ生活の実践について話されました。

3時間半の楽しい集会がアッという間に過ぎました。皆様ありがとうございました。

歳を忘れた『うり坊』

長宗清司

●ながむね　きよし＝1935年京都市生まれ。39歳の秋「京都趣味登山会」に入会。主に琵琶湖周辺の山を仲間と歩き、未開発の低山にルートを拓く。現在、結成11年を迎える「湖周山遊会」の主宰代表。2001年びわ湖湖岸（渚）一周を例会で達成。著書／『琵琶湖周辺の山』、随筆集『うり坊の足音1〜4』。

〈商家の家訓の話　第17回〉

番外編：大震災に寄せて —今こそ“希望”を

末永 國紀

2011年3月11日、現存の誰も経験したことのない数百年単位でしか突発しない大震災が発生してしまった。どんな言葉や表現よりも、TVの画像が自然の暴虐の威力を眼前に繰り返し見せつけた。

地震と津波と原発事故が重なるという明らかな非常事態である。地震と津波は天災としても、原発事故と数十万人の被災者への対応は、もはや人災と呼ぶほかはない状況に陥っているといわざるを得ない。

被災後1カ月を過ぎても、震災関連の法案は1本も国会に提出さえされていない。原子力発電にも放射能にも素人である政府首脳が、事態悪化の追認を繰り返した挙句に、「計画避難」という生活の根底をくつがえすような避難指示を、何の対策もないまま出している。

二宮金次郎（尊徳）の石像
（東近江市立湖東図書館）

他方、原発事故の当事者であり、コストカット（経費節減）で上りつめた文系社長を戴く東京電力は、漁業への影響も海外の反響も考慮することなく、中古タンカーによる処理案も一蹴して、通告する前に放射能汚染水を海に放出する始末である。

政府にせよ、企業にせよ、これほどまでに愚劣なトップが居座り続けることの災厄は、これからの復興にとって深刻な障害となることは誰の目にも明らかであろう。例えば、首相の肝いりで発足した、政治学者を議長とする復興構想会議の議論である。初会合でさっそく提起されたのは、震災復興税という増税案であった。平時でさえ難しい提案を、いまだ被災者の生活の展望も拓けない非常時に、構想もなしに不用意に持ち出す安直な対応には、ハナから失望せざるを得ない。

その場しのぎの、継ぎはぎだらけの言動をする人間と思われてしまっては、政治も復興もない。真に復興に手をつけられるのは、もはや国民の信を得た政治

のみである。一丸となって再生に取り組む体制の構築こそ急務である。

とはいえ、日々の生活は待ったなしである。突然の大震災によって理不尽に命を奪われた人の無念さは察するに余りあるが、身をもって逃れ、危うく命を全うできた人々にも生活の再建を図る苦難が待ち受けている。

家も庭も全てを津波に流され、かろうじて見つけた桜の幹の断片を手にした若い父親が、「毎年、この桜の下で花見をしていました。今から思えば本当に夢のような日々でした」と語っていた光景が忘れ難い。人間の生活は本来無常であり、明日の分からない危ういものであることをあらためて実感させる映像であった。

もちろん、この日本列島には昔から天災地変が幾度も繰り返された。過酷で甚大な被災を受けた場合、人々はどのような心情と覚悟で日々を送ろうとしたのであろうか。

そのような時に想い出されるのは、二宮尊徳のことである。尊徳の幼名は金次郎。金次郎は、小学校の校庭に建てられた、薪を背負って歩きながら読書する像によって知られている。金次郎は、天明7年（1787）に相模国（神奈川県）の農家に生まれ、後に尊徳と名乗った江戸後期の農村復興運動の指導者である。

没落した自家を勤倹力行に努めて再興した。具体的には、人並みすぐれた体力を活かして厳しい労働に耐え、年貢の掛からない荒地を耕作して得た稼ぎは、田畑を買い求めたり貸金に回したりして回転させた。

26歳で武家の若党（従者）となって主家の財政を立て直したのをきっかけに、荒廃した関東農村の再建を求められ、転居を繰り返しながら復興に奔走する生涯を送った。没年は安政3年（1856）、享年70。

尊徳の時代は、歴史的な大きな災害はなかったとはいえ、それでも悲惨な天保の飢饉は発生している。自然の暴威に備える手段の乏しかった当時、農村復興に命を懸けていた尊徳の心情は、次の歌によってうかがわれる。

この秋は雨か嵐か知らねども
今日の務めに田の草を取る

西洋にも似たような表現がある。「たとえ明日地球が滅ぼうとも、今日リンゴの木を植えるだろう」という意味の言葉である。

尊徳の「今日の努め」の歌、西洋の「リンゴの木」という表現は、不確定な未来に何が起きようとも、人間は創造的活動から離れることはできないという意味で、ともに希望を語っているとも解されよう。被災者や被災地、そして日本全体に向けて今こそ届けられなければならないもの、それは〝希望〟である。

（2011・4・16記）

近江商人に学べ

末永國紀

●すえながくにとし＝1943年生れ。同志社大学経済学部教授。経済学博士。（財）近江商人郷土館館長。

著書／『近代近江商人経営史論』（有斐閣）、『近江商人』（中公新書）、『近江商人学入門』（サンライズ出版）、『日系カナダ移民の社会史』（ミネルヴァ書房）

山暮らし子育て日記

作：オノミユキ

オノミユキの住む木地山は、朽木の中心地から車で約20分。ちょっとした奥山である。

山はスギの緑と雑木の黄緑。川のせせらぎや鳥のさえずりが心を癒してくれる。

ピーチク
パーチク
サラサラサラ…

そんなのどかな地域で子育ては のんびり、おだやかに…

お子たち！朝ですヨ～♥

なれるわけが……

時間ですヨ～ 朝だよ～ 起きてね～

ねむーい

イヤだー

なく……!!

起きろ～っ

毎日、市営バスで登校する上の子ふたりをバタバタと送り出す。

いってらっしゃい

いってきま～す！

いえば～!!

ふう…ホッとひと息♥

とりあえず コーヒータイム

の、はずが…

あ、アンタがいたね。

ギャーギャー

末っ子の赤ん坊が、寝返りしたり、ものを口に入れたり、と目が離せない。

得意技はブリッジ

仕方ないから、おんぶして隣のお宅へお散歩。

おばあさん 日く、

そら昔は目を離す時は「ふご」に入れて育てたもんや。

ふご？

「ふご」とは竹で編まれた大きなかご。わらで編まれたものもあったとか。

稲わらをそぐって「はかま」と分ける。

わらをひっかくような作業を「そぐる」という。朽木弁かな？

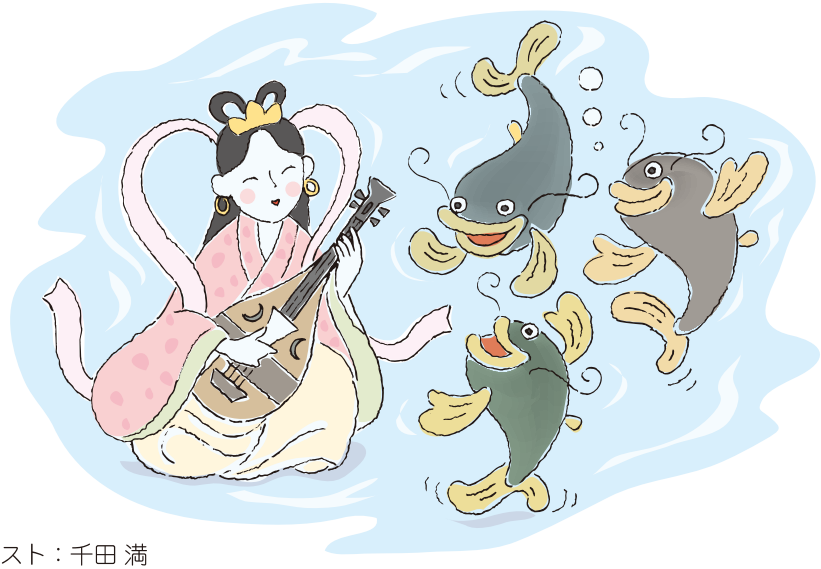
「はかま」とは茎を包む皮のこと。やわらかい。

●オノミユキ(本名 加藤みゆき)＝1974年生まれ。滋賀県志賀町育ち。1997年に朽木村(現高島市)に移住。朽木の自然、行事、人間などを3冊の本にまとめ出版。現在は3人の子どもを子育て中。

心温まる物語

もう一つの力を信じたい

今関 信子



イラスト：千田 満

このエッセイを書いている今も、テレビは、東日本大震災の被災地のようすを、伝え続けています。復興し始めた様子を見ると、ほっとして、問題山積の様子を見ると、心がふさぎます。津波の猛威を映す映像に、釘付けになって以来、心穏やかではいられません。

心配しながら、五月を迎えます。

私達は、今、ためらいのない言葉で、語り出すには勇気が要ります。

そんな中で、私は、もう一つの世界を信じたいと思っています。今いるところ、今見えるもの、今感じていること、そういう現実にだけに捕らわれず、もう一つの世界に心を置いてみることは、良いことではないでしょうか。物語は力を秘めています。

この出来事が起こる一週間前、私は、画家の鈴木靖將さんと、京都新聞出版センターで、最後の校正をしていました。「まんまる月夜の竹生島」というタイトルの絵本が、リニューアルされて、再び子どもたちの手に届くことになったからです。

前作の形を残しながら、新しい本になるわけですから、気になっているところを、書き直すことにしました。それで、この伝説が伝えようとしていることを、読み込んでいきました。この物語を語り伝えた、いにしえの人々は、なにを見、なにを感じ、なにを思い、なにを願ったのだろうかと。

ストーリーは、むかし、竹生島の弁天さんが、一年に一度、琵琶湖の魚を全部集めて、宴を催していたそうな、と語り出されます。コンクールがあって、歌や踊りが披露されるのですが、どの魚も自信過剰で練習不足。そんな中、自分たちの欠点を知ったナマズたちが踊ります。これが見事で、弁天さんは大いに誉められたと語ります。

ありえない話です。琵琶湖の魚が一堂に会して、宴を楽しむなんて。しかし、この物語は語ります。一年に一度の祭りとして。

魚たちは、食うか食われるかの毎日です。生きることがすべてです。ところが、この民話は、大きい魚も小さな魚も、南にすむ魚も北のそれも、共にあって、食いもしないし、食われもしません。弁天さんのかき鳴らす琵琶に合わせて、歌い踊るのです。宴の楽しさは、天女までも巻き込んで、夜が明けるまで続きます。祭りです。たった一夜だけの。

この民話を語り伝えた人々は、厳しい日常を生きていたにちがいありません。身分の差がある時代にあって、食われることのつらさを味わっていたのでしょう。権力に怯えていました。だから、この民話は語るのです。

人間には動かせない自然の仕組みの中で、だからこそ語られる「まさかの物語」を、民話にこめた人々の願いを、祈りを、静かに思います。

本などから語り出される、もう一つの世界に心を解き放ってみたいものです。

■まんまる月夜の竹生島

●編集・制作／京都新聞出版センター
●価格／1000円
●内容／『むかし、竹生島のべんてんさんは、一年に一どびわこの魚をぜんぶあつめて…』で始まるびわこの絵本がリニューアル出版。

今関氏のプロフィールは32ページ

M. Senda

●せんだ みつる＝1950年、滋賀県生まれ。大阪のデザイン会社を経て1980年「イラストレーションスタジオアビーロード」設立。イラストレーションを中心にポスターやパンフレット等を制作、ロゴマークやパース・キャラクターデザイン等グラフィック全般、広告・エディトリアルを中心に活動中。

夏蕨

三山　元暎

さし絵：中川 善雄

長浜御坊大通寺の本堂と大広間をつなぐ、渡り廊下の南側に立派な御影石の句碑がある。この碑には、大通寺第五世住職、横超院と江戸中期の著名な女流俳人、加賀千代女の「手をあげよ　同じ流れに住む蛙」「日陰のわらび腰をのしかね」という即興の連句が刻まれている。

千代女は、「朝顔につるべ取られてもらい水」などの句で広く知られた民衆のヒーローともいうべき人であったが、横超院の前では顔も上げられないくらいかしこまっていた様子が窺い知れる。畳に手をついたままの千代女に対して「手をあげなさい千代さん。あなたと私は聞法と俳句を生きがいとする仲間じゃないですか」「とんでもございません。私は日陰のワラビ同様に、この世の片隅で俳句を枕にひっそりと生きる、ひとりの女です。あなたさまにお出会いさせていただけただけでも幸せでございます。腰を上げるなんてとんでもございません」。優しさと謙虚さに満ちた会話が聞こえてきそうな句碑だ。

前置きが長くなったが、この「ワラビ」。山菜摘みというと必ず引用される「石走る垂水の上の　さ蕨の萌え出づる春に　なりにけるかも」の歌は、万葉の時代にもワラビ採りが大宮びとの大事な行事であったことを表している。全国どこの山野にも自生していてシーズンが長く、早春から六月頃まで楽しめる山菜の王様だ。さすがに里の林や土手のワラビは、初夏ともなると葉が繁り食べられないが、伊吹山など高い山地や高原では五月の末ごろから六月初旬にかけて盛りとなる。おひたしやあえものにして食べるのが一般的だが、ワラビご飯にしてもおいしい。わが家では、昨秋採って乾燥保存しておいた干しヒラタケを水で戻し、ワラビや鶏肉とともに炊き込む。これがまた実にうまい。

遠囃子（とおはやし）椀に沈みし夏蕨　野沢節子

三山 元暎

●みやま　もとあき＝1940年滋賀県坂田郡山東町（現・米原市）生まれ。長浜市の理事・経済部長を経て1995年8月から2005年2月まで山東町長。同月14日米原市誕生にともない退任。真宗大谷派真勝寺住職。

●なかがわ　よしお＝1936年生まれ。滋賀県展、長浜市展、伊吹を描く絵画展など入賞、入選歴多数あり。税理士。

本の紹介

最近入手した、気になる本・CD・DVDをご紹介します。

BOOKS

インディゴの悲しみ

●著者／眞野丘秋
●発行／日本文学館
●価格／450円＋税
●内容／15才の少年が求める自由とは？全国のインディゴとニートへ贈る、悲しくも希望に満ちた物語。

農民になりたい

●著者／川上康介
●発行／文藝春秋
●価格／690円＋税
●内容／彼らはなぜ「農民」になったのか？畑がオレを呼んでいる。岐阜県・横田三兄弟（JA、アパレル、機械メーカー出身）原木椎茸栽培など6名の若手農民の超実践版就農ガイド。

地域のブランド戦略 滋賀県編

●編者／林廣茂
●著／滋賀県地域ブランド研究会
●発行／文理閣
●価格／1900円＋税
●内容／ビジネス経営の視点から地域のブランド戦略を探る。文化事業、漁業、長浜の町づくり、製造業、林業のブランデングを紹介

不織布情報435号

●発行／不織布情報
●価格／31，500円年間11冊
●内容／機器特集は不織布検査機器。不織布関連メーカーは必読の老舗業界情報誌。不織布便覧も発行。

川道のオコナイ

●著者／中島誠一
●発行／サンライズ出版
●価格／2400円＋税
●内容／五穀豊穣と村内安全を祈願して年頭に行われるオコナイ。最大規模を誇る長浜市川道町のオコナイに密着。

近江能（の）文化登（と）傳統

●編集者／つがやま市民教養文化講座三十周年記念事業『近江の文化と伝統』編集委員会
●発行／守山野洲市民交流プラザ「ライズビィル都賀山」
●内容／つがやま市民教養文化講座が三十周年を迎えた。牧野信之助が編纂した滋賀県史をはじめとする昭和期の近江研究講座。

小船木エコ村ものがたり

●著者／NPO法人エコ村ネットワーキング
●発行／サンライズ出版
●価格／2000円＋税
●内容／つながる暮らし、はぐくむ未来。小船木エコ村へようこそ。エコ村のエコ生活を楽しむ人のつながりと暮らしのヒントが散りばめられている。可愛い本。

御礼
ばん大切にしたい会社』大賞
審査委員会特別賞 受賞

この度「第1回『日本でいちばん大切にしたい会社』大賞」にて、審査委員会特別賞を受賞することができました。このような賞を頂けたのは皆様の支えがあってこそと、感謝いたします。受賞に恥じないように「人を大切に」「継続は力なり」による、更なる強い体質づくりと組織の活性化で、魅力ある企業に、お客様、仕入れ先様から優先的に選択されるサプライヤーになれるよう努力いたします。今後とも、よろしくお願いします。

記念の楯

「皆さんとお話できることを楽しみにしています」

第1回『日本でいち

今回の賞を頂いたことで良い機会をいただきました。ここで当社をご紹介いたします。

●経営理念

新江州は『人を大切に』を基本として常に新しい価値の創造と豊かな未来社会に貢献する企業をめざします

1. 常に相手の立場に立って行動し、関わるすべての人を大切にします
2. 新しい価値の創造に挑戦し、お客様から優先的に選択されるサプライヤーをめざします
3. 社会ルールを守り地域社会と自然環境を大切にし、豊かな未来社会に貢献します

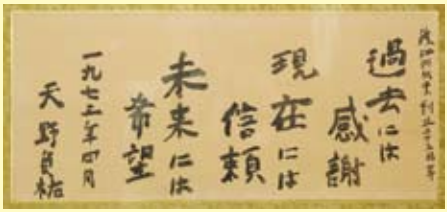
●社是

過去には感謝
現在には信頼
未来には希望

●行動の原点

前途洋々
（目標・目的を持とう）
勇気凛々
（自分の意見を持ち自主的に行動しよう）
自由闊達（明るく　楽しく　前向きに）

※経営理念は方針・考え方です。社是は人間としての生き方です。行動の原点は基本と心構えを表しています。



天野貞祐氏直筆の社是

皆様、機会がありましたら当社にお越しください。環境配慮商品を展示しているeプラザをご覧下さい。社員とお話してください。互いに触発しあいましょう。ちなみに、当社敷地内にある道路標識は”三方よし“の精神を交通マナーとマッチングさせたオリジナル製品です。ぜひご活用ください。

標識にも三方よしの精神が（当社オリジナル）

代表取締役社長　**草野 勉**

今回、36項目の経営指標チエックがあり、日頃、人権研修・ISO活動等で見直してはいますが、改めて会社を更に見直す良い機会でした。今回の賞は結果であります。今まで以上に経営理念が自然体で身に付く努力、全社員が同じ方向を向いて全員がその時、その年の新しい目標に個々の役割で挑戦し、結果を全員が喜べる〝魅力ある企業〟にすることが私の一番の責任です。今まで以上に全員がいろんなことでレベルアップができるよう努力し、内からも外からも、いい会社と言っていただけるよう前進いたします。

賞状

—第1回「日本でいちばん大切にしたい会社」大賞概要—

【概　　要】

応募期間：2010年12月～2011年2月10日(木)
応募総数：自薦・他薦を合わせ55社
審査方法：書類審査、実地調査（現場を訪問しての審査）
受賞企業発表：2011年4月27日（水）
表彰式：2011年5月16日（月）14時～法政大学・市ヶ谷キャンパス

【応募資格】

過去5年以上にわたり、下記7項目中5つ以上該当する企業
①黒字経営（経常利益）を維持している
②人員整理を行っていない
③障害者雇用率が2.0%以上である
④下請企業・仕入れ先への一方的なコストダウンを行っていない
⑤顧客のリピーター率が業界平均以上を上回っている
⑥法令を遵守している
⑦社会貢献活動を継続している

【表　　彰】

経済産業大臣賞＝未来工業株式会社（岐阜県）
中小企業庁長官賞＝株式会社日本レーザー（東京都）
実行委員長賞＝株式会社大谷（新潟県）
審査委員会特別賞＝東和組立株式会社（岐阜県）、有限会社おづつみ園（埼玉県）、株式会社能作（富山県）、新江州株式会社（滋賀県）、株式会社福島屋（東京都）

【主　　催】

「日本でいちばん大切にしたい会社」大賞実行委員会
構成機関：法政大学（法政大学大学院中小企業経営革新研究所）、日刊工業新聞社、あさ出版
実行委員長：法政大学学事顧問　清成 忠男

【後　　援】

経済産業省、経済産業省中小企業庁、中小企業基盤整備機構、日本商工会議所他
公式HP：www.taisetu-taisyo.com

講演日記

皆様のご支援でたくさんの講演依頼を頂きました。2011年3月～4月の講演をダイジェスト版でお知らせします。

生き方を学ぶ講習会
- 日時:平成２３年３月14日
- 主催:滋賀県立彦根翔陽高等学校
- 対象:第1学年200名
- 目的:外部講師の講義
- 会場:視聴覚兼多目的教室
- 講演:女神の前髪をつかめ 意識を変えればチャンスは来る
- 講師:辻村琴美

長浜市環境にやさしい日
- 日時:3月21日
- 主催:ながはまアメニティ会議
- 対象:長浜市民80名
- 会場:湖北文化交流センター
- 鼎談:2020年の長浜を語る
- 参加:石田道行、沢尾武廣、辻村琴美

静岡県中小企業経営
革新フォーラム21 3月例会
- 日時:3月23日
- 対象:会員４０名
- 会場:長浜アクトシティ
- 講演:人を大切にする経営道
- 講師:森建司

東日本大震災の現場からの報告会
- 日時:4月21日
- 主催:NPO法人環人ネット
- 対象:40名
- 会場:彦根サテライト
- 講演:気仙沼から
- 講師:田中光一　他

近江環人地域再生学座
- 日時:4月22日
- 主催:滋賀県立大学
- 対象:4履修生16名
- 内容:コミュニテイ・マネジメント特論
- 会場:研修室
- 講演:新しい時代の企業マネジメント
- 講師:森建司

第5回アグリモーニングセミナー
- 日時:4月24日
- 主催:ブルーベリーフィールズ紀伊國屋
- 場所:カフェテリア結紀伊國屋
- 講演:意識改革した市民がつくる新しい時代
- 講師:森建司

M·O·Hニュース

いいものみつけた
＜風で織るタオル＞
しなやかな風合い。電気エネルギーには風力を利用。EU規格の有機栽培綿を使用。フェアトレードで輸入された種は遺伝子操作をしていない。
池内タオル(株)
http://www.ikeuchitowel.com

＜しょうゆ顔三姉妹＞
近江國・湖北郷。江～姫たちの戦国～（平成23年）戦国の浅井三姉妹の家系図が手ぬぐいになりました。醤油組合が作ったので、しょうゆ顔です。

＜ヨシのお箸＞
エコで暮らす恵湖時代。びわ湖のヨシから生まれたお箸。大阪茶屋町の滋賀県認定農家・自家栽培ファーム直営レストラン「花様ka-you」で発見。

＜日本でいちばんたいせつにしたい新茶＞おづつみ園
第１回「日本でいちばん大切にしたい会社大賞に入賞した春日部市の（株）茶夢おづつみ園から、記念の新茶50ｇが届いた。四代目店主尾堤宏氏の感謝の言葉が添えられている。

TEL.0120 - 11 - 4759
http://www.ochanoko.co.jp

■移り住むなら滋賀県・湖北 田舎暮らしフェスタ 2010
今年は米原市甲津原で開催。どんなイベントかは、お楽しみに…。
http://cohokstyle.shiga-saku.net/

《おかえりなさい》
栗東市・金勝寺で十三詣り復活。重要文化財「木造虚空蔵菩薩半跏像」が20年ぶりに大阪の博物館から帰ってきた。勝山圓昭住職が亡き住職の悲願を叶えた。

「循環型社会を目指す～M·O·H通信～」の発行に当たって

代表　森 建司

20世紀型社会は経済至上主義の時代であった。科学技術の進歩とそれに伴う工業や流通の発展は、世界的なスケールで人々に物による恩恵をもたらしたが、同時にバランスのとれた自然との共生社会を破壊した。経済至上主義とは物の豊かさを最高の幸せとして捉え、その対極にあるものの価値をほとんど消し去ろうとするものである。人々の価値観を情報操作で画一化して、特定のものに集中させようとするマーケット戦略は個人の人生観、社会観にまで侵入し、その独自性、不可侵性まで奪って行った。このことによって人々は哲学的な意味の自己をなくしてしまった。

今こそ新しい時代として循環型社会を作ろうとしているわれわれは、自己を証明する、こころとか思いを取り戻さなければならない。死生観や人生観、先祖や子孫、生涯をかける志、自己を自己らしく生き抜くための人生哲学など。そしてそれは自然との共生社会を目指すものであり、人としての真の生き様を問うものであらねばならない。

この実現のために
「循環型社会を目指す～M·O·H通信～」を発行する。

《 M·O·H通信概要 》

■目的

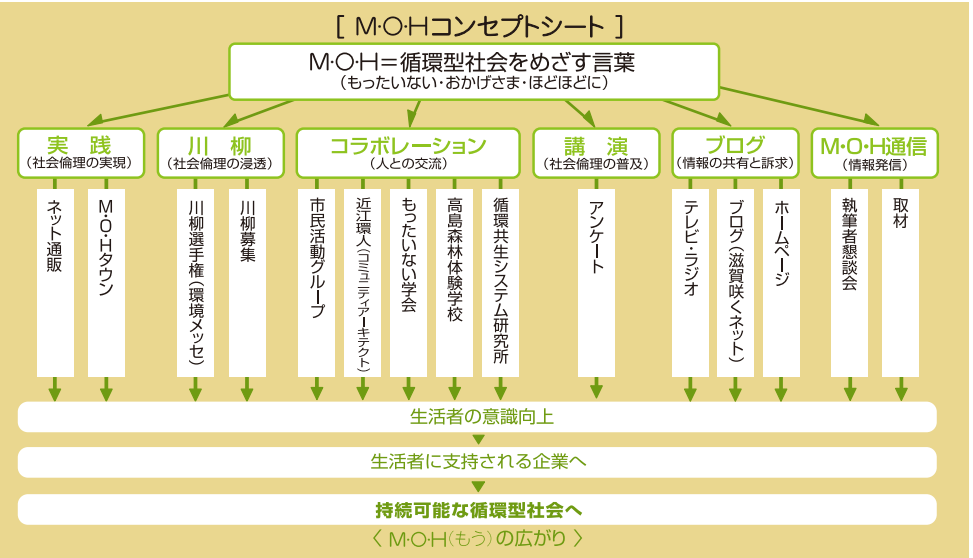
(1) 循環型社会構築に向けた意識改革
(2) 浪費型社会通念の脱却
(3) 人生哲学を学ぶ

■事業

(1) 通信の発行及び出版
(2) 講演会、勉強会、シンポジウムなどイベントの開催

■事務局

〒526-0111
滋賀県長浜市
川道町759ー3
循環型社会システム研究所
TEL.0749-72-5277
FAX.0749-72-8681
e-mail:tsujimura@shingoshu.co.jp
代表:森 建司
担当:つじむら ことみ



読者の声

★親孝行とは親の元気なうちにするのが親孝行。親の体が悪くなってからの介護は義務と責任。空気や水に似て、ある時は気づかず、無いと…。
長浜市　草野 勉

★森会長さん、三山元暎さん、畑裕子さんなど懐かしく拝見しています。
長浜市　中野 彰夫

★おめでとうございます。私もとってもうれしいです
hiro

★2011春は花見のシーズンも東日本の地響きで落ち着きません。
不織布情報　勝田

★作物にも人間にもストレスを与えない農業
大津市　岩崎 章代

★冷却水　まけば漏れ出す放射能
栗東市　勝山 靖

★本の紹介がベスト。特に食の歴史と日本人。日本精神を再発見できた。
野洲市　山田 清広

★取材を受けるたびに、利用者の方々が成長されるのを感じます。次の号もみんな楽しみに待っています。
びわこみみの里　中村 正

★現場のリアルさ、イキイキとした人々の様子をうまくとらえた良い冊子。レイアウト、写真が読みやすい。
JAえひめ南「みなみかぜ」　広報
清水 純

★堅田の紀伊國屋・結で読みました。続けて読みたいです。生産者と消費者交流会も行きたいです。
奈良市　佐藤 伊佐子

★長浜市民病院で拝読しました。滋賀県の企業が「もったいない・おかげさま・ほどほどに」を具現化されていることに感じいりました。近江商人の「三方よし」や、禅の「足るを知る」にも通じ、さらには環境問題、人としての生き方にさえ言及されており、素晴らしい。
米原市　川瀬 満雄

★ブログにて感動の動画をありがとうございます。元気を出して、自分に何ができるか考えます。
合唱サークル「アンサンブル・ころろく」

《次号予定》
2011年9月発行予定

■特集：『匠⇔技』
●インタビュー／京都大学公共政策大学院・経済研究科　岡田知弘教授
●寄　稿／大阪産業大学教授・花田真理子
●取　材／「豊田市里山体験館・すげの里」
●取　材／「電気を使わず」非電化工房
●取　材／「オシャレに甦れ」久宝金属製作所 川添光代社長
●連　載／通常通り
※ 敬称略、予告なく変更いたします

【お詫び】
今号は予告の特集を大幅に変更いたしました。お詫び申し上げます。

編集後記

この度の、東日本東北大震災の被害に遭われました方々と関係するすべての方々に心からお見舞いとお悔やみを申し上げます。読者の方に被害はなかったか、ご不便はないだろうかと、案じております。なにもできない不甲斐なさをお許しください。

世界が被災された方々の謙虚な生活態度に感動を受けています。

せめて、弊誌にできることは…。大地震、大津波、原子力被害、この天災と人災が入り交じった今を、忘れないようにしっかり見つめよう。そして復興をきっかけに日本の暮らしを見直そう。天がもたらした大きな命題に向かい合おうと思います。琵琶湖～比叡山～伊吹山から、愛を込めて。　こと

《M·O·H通信》受付中！

あなたも「M·O·H通信」を読んでみませんか。特典として、M·O·H通信、講演会のご案内をいたします。あなたの活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

お名前、年齢、郵便番号、住所、電話番号、fax（あれば）、e-mailアドレス（あれば）、心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

《M·O·H通信》申込書

フリガナ		年齢	希望冊数
お名前			
住　所	〒		

電　話	FAX	メールアドレス

あなたの心に残った一言、MOH川柳をお書きください。

※記入いただいた内容については、目的以外のことに使用または転用はいたしません。

キリトリ線

M·O·H通信　Vol.32（通巻33号） 2011年6月20日発行　発行部数6,000部

●編集・発行/新江州（株）
循環型社会システム研究所
M·O·H通信編集局

代　　表　森 建司
編 集 長　つじむら ことみ
校正協力　稲垣 重雄
取　　材　細井 美保
荒木 美晴
古田 紀子
デザイン　伊達デザイン室
写　　真　辻村写真事務所
印　　刷　プランセル
ホームページ　プランセル
ブ ロ グ　滋賀・咲くブログ

●執筆者懇談会
内藤 正明　畑 裕子
海東 英和　堤 幸一
山田 朝夫　進 ひろこ
下西 康嗣　中村 誠
末永 國紀　笹山 千怜
花田 眞理子　結城 美枝子
弘中 史子　松崎 和弘
今関 信子　井上 昌幸
山崎 隆　辻村 耕司
三山 元暎　佐々木 洋一
加藤 みゆき　徳永 拓美
清水 安治　山口 美知子
檀上 俊雄　岡部 達平
森 孝之　豊田 一美
（順不同・敬称略）

●ご協力
滋賀県
琵琶湖環境科学研究センター
循環共生社会S研究所
高島森林体験学校
麻生里山センター
NPO法人環人ネット
近江環人 地域再生学座
もったいない学会
野洲生活学校
EEネット
中小企業家同友会
（順不同）

●支援
新江州（株）
〒526-0111 滋賀県長浜市川道町759-3
TEL.0749-72-5277　FAX.0749-72-8681
★ブログ　滋賀・咲くブログ★
http://moh.shiga-saku.net/
★ホームページ★
http://www.mohmoh.jp/
MOH図書館　検索

※記事中での写真・本文につきましては、無断転載を禁じます。